青鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第二卷■第十號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜　十月號目次

白き蛾（短歌）……茅野雅
近代人の告白（ミュッセ）……野上彌生譯
傷（小說）……人見直
死の前（小說）……荒木郁
旅に行く（小說）……尾島菊
諒闇（短歌）……原田琴
進化論上より見たる男女（論文）……上野葉
習作の六（小說）……杉本正生
お夏のなげき（戲曲）……小林歌津
お參さまの小函（詩）……紅吉
圓窓より（樋口一葉）……らいてう

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

歸つてから……紅吉
編輯室より……同人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白き蛾 —茅野雅—

木曾川や針金をもて吊したる橋をふくなり初
秋の風

秋來れば旅ゆく人も日に悲し戀の傷手をおへ
るごとくに

いまはしき誹謗の中にほほ笑める人のかなし
さはたおほらかさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さかしげにもの云ふ人をおもひ出ぬしろき一重の牡丹咲くとき

なつかしきおもひ出の家いつのまに君やどりけんあとかたもなし

ましら玉十尋の谷をまろび落つるごとくひびきぬ隣のピアノ

蝶二つ厨のまへのくろき戸に模様のごとくとまれる夕

とことはにさめじと誓ふうしろより別れて後をおもへる女

幾度もこころの奥の戸をたたくこはき疑ひけふもまた來ぬ

あき足らぬ戀の故にかあきはてし戀の末にか涙ながるる

おやみなく虫の鳴く夜を酒の香の漲る室にねむりぬ女

秋來れば瓦斯の光もものかなし机にとまるしろき蛾さへも

橋の上に白き砂まふ大坂の街もなつかしをりにふれつつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みづからを憎む故より吾に似し吾が子の癖を憎みあはれむ

つつましきふるき都の女等のもの語り居る秋晴し窓

見かへれば死よりも更にかたき道つまづきつつも君と來しかな

十月の雨のなかにてちちとなく鼬の聲に身の果敢なまる

少女子のネルの姿をおもふ時コスモスの花目にうつるかな

近代人の告白　――ミユッセエ――

人の生涯の歴史を書くには、先づこれまで生きて來たといふ事が必要である。私が自分の事を書いてゐるのはこれがためである。

私はまだ若いのだが、忌まく〱しい不行跡に身をもち壞してから後三年の間の私の身の上の出來事を話さうとしてゐるのである。もし不行跡に苦しめられるものが私ばかりだつたならば、私はその事に關して何んにも云ふ必要はない。併し澤山な受難仲間を持つてゐる事だから、その人たちの爲にと思つて書いてゐるのである。と云つてもその人たちが私に注意を拂つてくれるかどうかは分らない。併し誰も私の忠告を納れてくれないとしても、猶私自らにとつては最良の治療なる自分の言葉に滿足しよう。而して陷穽(わな)に捕えられた狐にならつて私の囚えられた部分を嚙み切つてしまはう。

私は先づその世紀病にかかつてゐた時の事を話さなければならぬ。

私はある假裝舞蹈會のあとの盛んな晩餐のテーブルに着いてゐた。私のまわりには華々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しく着飾つた私の友達がゐた。どの列びにも彼等の美と悦樂とに輝いてゐる若い男女がゐた。左右にはえり拔きの食べ物と細口瓶と飾り燭臺と花とがあつた。頭の上には物騷がしいオーケストラがあつた。而して私と向ひ合ひには私のをんなが坐つてゐた。立ち優れた美人で、その人に私は魂を打ちはめてゐた。

私はその時十九であつた。私は病氣とか不仕合とかは一つも經驗がした事がない。氣高い生一本な性質で、何につけても胸に溢るゝ希望を持つてゐた。酒の蒸し立つ氣は血管の血の中まで這入つて來た。一人の見たり聞いたりするものゝ悉くが皆めい〳〵に氣に入つたものゝように話されるのはこんな我を忘れた瞬間の時の事である。全自然が無數の小さい面をもつた一つの貴重な石のように見える。面の一つ〳〵には神秘な名が刻まれてゐるのである。私は世界中のものが兄弟のやうに感じられるので、微笑を見つければすぐと誰をでもみんなかき抱く事が出來た。私のをんなはその晩私と約束が出來てゐたので、私は靜かに唇に杯をあげた時、彼女を見やつた。

皿を受け取ろうとした時に私はホークを落つことした。それを拾はうとしてうつ向いたが、一寸と見つからないので、私はどこに轉げて行つたのかと思つてテーブル掛けをめくつて見た。私はテーブルの下で私のをんなの足が彼女と並んだ若い男の足の上に乘つかつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐるのを見とめた。これ等の足は組んでからまつて、時々二人は靜かにどちらからも締めつけてゐた。

私は全く落ちつき拂つて起き直つて、他のホークを貰つて食事を續けた。私のをんなと彼女の隣りの者も亦非常に落ち着いてゐて、話もしなければお互ひ同士顏を見やる事もしない。若い男はテーブルに肱をついて、彼に頸飾りだの腕輪だのを見せてゐる他の女とふざけてゐた。私のをんなはげんにやりして目を見すえたまゝ、身じろぎもしなかつた。私はその後の食事の間も二人に氣をつけてゐた。それで彼等のそぶりにも顏色にも彼等を裏切るような事はなんにも見えなかつた。終にデザートの間に私は私のサーヴェトを落して再びこゞんだ。足はしつかりと締めつけられて同じ場所にあるのを見た。

私は其晩をんなを見送ることに約束してあつたので、私が廣間を横ぎつた時彼女は私を呼んだ。

『ね、オクターヴ、行きませうか。私もういゝのよ。』

私は聲を出して笑ひ出した。而して返事もせずに出て行つた。少し歩いた後で私は或る石の上に腰を下ろした。自分は何を考へてゐるのか自分でも分らなかつた。私は今まで嫉妬した事もなければ氣を廻した事さへなかつた此女の不貞腐れのために、殆んど氣が遠く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なつて狂氣にされてしまつた。私の見た事には疑ふ餘地もなかつた。私は棍棒でぶんなぐられたやうにぼうつとなつてゐた。其處に坐つてる間も何を考へたか思ひ出す事が出來ない。たゞ大空をうつゝなく眺めながら一つの流れ星を見つけたので、うや／＼しく帽子を脫いで、詩人たちがその中に世界の滅亡を見るといふ、その星の逃げ去り行く光りの輝きに挨拶した事だけを覺えてゐる。

私はなんだか考える事を奪ひとられでもしたように、何一つ感じる事もなければ會得する事も無く靜かに家に歸りついた。着物を脫いでそれから寢床へ行つた。併し枕に頭を載せてゐられなかつた。復讐の念はひどい力を以て私を捕えた。私は恰も身體の筋肉が木になりでもしたように壁に向いて突然立ち上つた。それから兩手をさし延してどなりながら寢床を出て行つた。踵でやつと歩かれるほど私の足指の神經は縮かんでゐた。私はこんな風で殆んど一時間を過ごした。全くの狂氣で而して骸骨のように硬直になつてゐた。それが曾て私の經驗したはじめての憤怒の發作であつた。

私が私のをんなから驚ろかされたその男は、私の最も仲のいゝ友達の一人であつた。私は次ぎの日デゼネエと云ふ若い辯護士と連立つて彼を訪問した。私達はピストルを持つて今一人の介添人達と共にヴァンサンヌの森へ行つた。途中私はよく氣をつけて私の敵手に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

近づいたり話をしたりする事を避けた。こう云ふ風にして彼を打つたり侮辱したりしないように私自身を防いたのである。こんな暴力は法律が適當な順序をふんだ決闘を許してる間はいつでも見苦しい無用な事なのである。私は彼に目を見据えないではゐられなかつた。彼は私の青年時代の友人であつた。而して長い間私たちはお互ひで出來るだけのいろんな事をした。彼はをんなについての私の戀愛の事もよく知つてゐた。而してこう云ふ同盟の仕方は友達の間を神聖にするもので、例へ彼が同じ女を戀する事があつても、私にとつて代ろうとする事は出來ないと云ふ事を屢々はつきり私に悟らせるようにしてゐた。こうして彼には悉く信用を置いてゐたので、私は恐らく決して彼以上に親密に人間の手を握りしめた事はなかつたゞろう。

　私は古代の英雄の如く友情を語つたり私のをんなをかき抱いたりするのを見たその男を物珍らしく眺めた。私はどう云ふ風になつてるのか知らと思へて、たけ〲しい目つきをして彼を見上げ見下ろした。十の時から知つて、その人とは日毎に最親しい欠ぐる事のない友情をもつて暮して來たその男が、私には今まで見た事もない人のよう見えた。私はいたとえを引いて見よう。（未完）

野上彌生子譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

傻

—人見直—

一

鬼になつて澁くつたといつて、松太郎は、また皆から泣かされた。………

いくら泣かされても、少年は、さ程つらいとは思ひはしないのだけれども、斯うして無理に意地惡く鬼にばかりさせられて、皆と一共に逃げたり隱れたりすることの出來ないのが、破れたやうに情けなくて、しやうが無いのである。それに少年は、こうして皆から意地められたり、泣かされたりした上に、其れよりも、もつと悲しい遣瀨ない嘲りの言葉を、何れ程浴びせかけられても、默つて一人で何時も河岸の柳のうす暗らい影に來て、初夏の夕暮を聲も立てず、うすら淋しく啜り泣かなければならないやうな——さう云ふいぢらしい剝がれたやうな切なさも傻といふ肉體の淺猿しい劣敗が甘んじてさせることであつた。

傻だから駝脊と言はれて嘲けられるのは、少しもつらいとは思ひはしない。

けれども傻だからと云つて鬼にばかりさせられて其れをたまに拒んだ爲めに皆から泣かされた時に、家へ駈けて行つて、思ふ樣母親の前で聲を上げて泣くことの出來ないといふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のが、どの位少年には侘しく頼り無いであらう。若し皆に意地められたといつて、泣きながら家へ歸りでもしやうものなら、父親は不具な子に對する偏愛から生ずる隨分と殘酷な絶望的な言葉を頭から浴びせるばかりで無く、ぢつと見ては居られない程、少年を非道い目にあはすのであつた。

「弱虫め！何故殺されて來なかつた！」

恁ういふ聲の下に、少年は疊に打ち倒れるばかりに父親から打たれるのであつた。

其れだから例へ皆から何んなことを云つて嘲けられても、此の肉體上の劣敗が、波打つて來る心の悲憤を壓へつけてしまつて、只皆から此の上意地められたりしないやうに、出來るだけ皆の氣嫌を取つて居なければならなかつた。

戸外へ出さへすれば、少年は、屹度泣かされずにはゐなかつか、どれ程又泣かされても少年は皆の後ばかりを追つて離れやうともしなかつた。

斯うして少年は亂暴な短氣な多くの者のために、惡戯の材料にされたり、嘲罵の的にされたりするのを、呪ろはしく思ふことの無いではないが、其れも或る時は、皆が自分を仲間に入れて居て呉れるトレレーションに對する輕い税のやうにさへ感じることがあつた。

痛ましい肉體の劣敗は、少年に、己れの肉體に加へられる苦痛や嘲笑なら、如何なる苦

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

痛にも執拗に盲目になるやうに教へた。

松太郎は、涙の乾ききらない、こそばゆい目を上げた。

街燈のまはりには薄暗い靄がしつとりとまとひ付いて、瓦斯の灯が吸取紙にインキを一雫滴らしたやうに、ぼつたりと怠るそうに見える。

柳の影は、もう暗らくなつて、蝙蝠がひらひらと飛び廻つてゐた。

前には濁つた堀割の水が、だらけたやうに流れてゐる。そして其の堀割には、なつかしい低い橋が幾つもかゝつて居る。

少年は、何時までも其處を動かうとはしなかつた。そして様々と考へられた。

――自分は何故僕になど生れたんだらう。其麽ことは少しも悲しいとは思ひはしないのだけれども、僕に生れたからつて恁麽に皆から意地められたり泣かされたりするといふのが情けないのだ。此れから家へ歸つて見てもつまらない。鬼になつこも好いから皆の集つてゐる方へ行かう。而して、あやまつて又仲間に入れて貰はふ。打たれた上にあやまるといふことは實に厭だけれども、あやまつて鬼になりさへすれば、皆な喜んで仲間に入れて呉れるに相違ない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何うしやうか――色々と思ひ惑つた。すると、足音も立てず不意に後からやつて來て、少年を脅かした者があつた。少年が驚いて後を振り返つて見ると其處には四五人の少年が、舌を出して冷笑するやうな顔付をしたり、拳を固めて振つて見せたりして、少年を見て居るのであつた。

鬼になつて
迯くるやつは
石垣盜んで
ごやされた――

斯う歌ひながら、聽てぞろぞろと手を繋ぎ合つて、彼の傍をわざと幾度も往つたり來たりした。

少年は、たつた今、自分があやまつて鬼になりさへすれば、皆は喜んで仲間に入れてくれるた違ひないと思つたばかりではあるが、恁ふしてうすら悲しい河岸の柳の影に佇んで、何をされてもをとなしく抵抗せずに、ほの暗らい河面を眺めて居るものを、そしてまださつきの涙も、乾ききらずに居る者を、其の上に猶執拗く後からそつと來て、耳を引張つたり不意に來て突き當つて行つたりするのだもの、誰があやまつて鬼になぞなつてやるもの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。引張られた耳は斷れたつて此處を動くものか。

――少年はふと恁麽ことをしよんぼりと思つて見たが、それは唯、瓦のやうな、そして剝げた心の中に寂しく起つた卑屈なトランシトリイな反抗の果敢ない氣まぐれな戲れに過ぎなかつたのである。

それでも少年は自分の手先の微かに顫えて居ることを知つた、けれども肉體上では彼等に到底敵するものでないことも好く知つて居る。知つて居るから猶更少年には哀しくてならないのであつた。

蝙蝠がひらひらと柳の暗らい影を飛び出て、そのあたりをはね廻つて居る。

濁つたどす黑い堀割の水へ、ぽたりと滴らしたやうに向う側の灯影が青白く映て居て、ぢつと其れを見て居ると、他愛も無く心はぼつとなつて了ふのであつた。

氣が付くと、仲間はもう何處かへ行つてしまつたと見えて、振り返つて見ても影も無い。と、寄りどころも無い、うらびれた心になつて、咽ぶやうな哀愁が、不意に少年の身を、しかし柔らかに包んだ。

思ひもかけぬ初夏の夜の、かうした行きばぐれたやうな賴り無い、ひつそりとした淋しさが、染み染みと感ぜられるのであつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

目の前の水は靜んで、少しも動かない。その水の面へ遠くでする少年達の面白そうな樂しげな騷ぎが、夢のやうに微かにかすかに響いて、つくづくと少年が自分の孤獨を嘆かずには居られないやうにさせるのであつた。

すると、少年の耳は、其の時暗らい水の中から

鬼になつて

じぶくるやつは

石垣盗んで

ごやさ……れ……た――

と云ふさつきの聲を仄かに聞いた。其れは例へば黄ろい蔦の逼ひ纏つてゐる廢頽した教會の壁に寄りかゝつて、堆く積つた落葉のうす濕つた香ひを、なつかしんで居る時に、其の教會の古い尖塔の鐘が、ひとりでに鳴り出したやうな氣がしたと同じい思ひのするものであつた。

少年は半ばは自分の耳を疑ひながら、吸はれ入るやうに其の水面を締視めて居ると、ある柔らかな微笑むやうな温いものゝ中に、其の儘持つて行かれる樣にさへ感じるのであつ

た。そうして觸れば消えてしまふやうな其の聲の終りの方が、淋しい寄りどころも無い少年の心にからまつて、何故の悲しみとも知れぬ涙が靜かに頬を傳ふて落ちるのであつた。

二

少し位の雨には濡れることは何とも思ひもしないで、多くの少年が暮れ方から誰が誘ひ出すといふことなしに、集つて來て、何時も迷藏をして遊ぶのが例であつた。そして其の迷藏の遊びの中には屹度傻の松太郎が鬼になつて交つて居るのであつた。

丁度何日ものやうに蝙蝠が、うす暗らい河岸の柳の影を飛び廻つて居る頃である。松太郎は、塀に顏を推し當てたまゝ皆が各々隱れてしまふのを待つて居た。

そうやつて少年は、正直に顏を塀に推し當てたまゝ、自分一人を取り殘して、つれなく逃げて行く仲間の、樂しそうな、すげない跫音を聞いて居ると、吸はれ入るやうな淡い哀愁を覺えるのであつた。

それは少年がまだ六つか七つの時分、大きな胡桃の樹の下に、蓆を敷いて、四五人の女の子に交つてまゝごとをして遊んだ時に、何時も少年の「おかみさん」になつた清元の師

匠の家の俊ちやんと呼んだ目のぱつちりした色の白い女つ子があつた。其の俊ちやんが何時か見えなくなつてしまつたが、後になつて俊ちやんは、舟でなければ行かれない遠い所の伯母さんの家に貰はれて行つたと聞いた時に、何だか自分一人置きざりにして默つて行つてしまつたのが、腹立しく考へられて、非常にさびしく悲しくなつて思はず泣き出したことがあつた。其れと似寄つた佗しい訴へるやうなある孤獨を今感ずるのであつた。

此の時遠くの方で

「もうい丶よ――」

といふ仲間の聲がした。それは澄んだ夕暮の空氣に響いてかなしく聞えた。少年は太儀そうに醜い駝脊の身體を動して、聲のする方を頼りに探しに行つた。

然し何れ程探して見ても、誰一人見付からない。少年は實際探し飽いてしまつたか、默つて家へ歸ることは出來ない、若し其麼ことでもしやうものなら皆から、どんな非道い目にあはされるか分らないから。で何時も好く見付け出す場所といふ場所は、幾度も殘らず探して見たけれども其處には今日は影も見えない。

夜となると此の一時の蕭やかな水のやうに靜かな沈んだ夕暮の空氣が、殊更、少年の心をけばけばしく焦らだ丶せた。そして、途方に暮れて燦めく星の下に立つて居ると捉へる

ことの出來ない、輕い疲れを覺えるのであつた。少年は聲を上げて泣き出しそうになつた。何處へ隠れたのだらう――恁ふ思ひながら、それでも猶同じ所を探して見るより他にしやうが無かつた。

「皆、教會の中に隠れて居てよ」

恁ふいつて少年に告げて呉れたのは、髪の濃いそして情深そうな柔らかな輝きのある一人の少女であつた。少女は松太郎を見て大きな目でにつこと笑つて見せたが、彼は却つて狼狽へたやうな様子であつた。何故となれば少年は今迄に誰からも自分を勞はつて呉れるやうな言葉をかけて貰つたことが無いからであつた。少年は、唯もう嬉しいやうな悲しいやうな心持になつて、わけも無く胸が込み上げて來るのであつた。默つて其處に立つて居ると少女は傍へ寄つて來て、

「あなた何時でも鬼にばかりさせられて居るのね、全く皆さんは狡いわ、此れからきつと私があなたに教へて上げてよ」

と、言つてくれた。温かい薔薇のやうな匂やかな息が咽ぶやうに少年には思はれた。

「早くいつてらつしやいな」

此の言葉を聞くと、少年は、電氣にでも打たれたやうに、急いで教會の方へ行つた。

教會の裏庭には果たして仲間が隱れて居た。中には、其處に熟つてゐる未だ黄ろくなりきらない枇杷の實の汁を啜つて居る者もあつた。

「みんな見付けた！」

駝脊はをどをどしながら、しかし自分一人で見付け出したやうな顔をして恁う云つた。すると仲間の中で一番年の多いそして一番亂暴で巾を利かして居る鐵造といふ鑄掛師の子が

「貴様誰かに教はつて來たらう、それでなけりや此處が見付かる譯が無い」

と云ひ出した、少年は別に彼の顔を見て居るのでは無いが、たしかに枇杷の木に凭りかゝつた鐵造の鋭く尖つた眼が此方を向いて居るのを直覺することが出來るのであつた。彼は懼えたやうに身を震はせた。若し教はつたことが眞實に分れば、又皆から意地められたり嘲けられたりしなければならない。彼は決心して云つた。

「うゝん、さうぢやない」

「噓つけ！俺ちやんと知つてるんだ」

「…………」

「誰に教はつたんだか言へよ、今日はなぐりやしないから」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「だつて誰にも敎へて貰やしない」

「駝脊の癖に生意氣言ふない」

鐵造は枇杷の汁を啜つた後の軟らかい種を松太郎の顏に打つけた。其れを合圖に其處に居た者は皆わざ〳〵少年の前にやつて來て、枇杷の種を打つけたり、背の高くなつて居るところを擲りつけたりなんかした。

平常何んな事をして意地めうれても、我慢をして忍んで居るだけに、斯う云ふ時に一層冷たい果敢ない涙が止め度も無く眼に滲んで來るのであつた。

少年のグルーミイな悲しみは、自分が皆と一共になつて逃げたり隱れたりする、うす明るい夏の夕暮の迷藏の秘密な樂しみを味ふことの出來ない――――其れを言ふのではない。其れは又其れ程つらいことゝも思ひはしないけれど、唯慿ふして毎日幾度も泣かされるやうなことに出會つても、自分の爲めに心から勞はつてくれるやうな母の優しい潤んだ目が少年と共に涙を流してくれたことが無いのが情けなく、うらさびしいのだ、少年は堪まらなくなつて泣き初めた。打たれたところが痛いからではない。例へ何んなに強く打たれやうとも、それはぢつと我慢が出來る。けれども斯う云ふ時に自分を慰めてくれる只一人の人も居ないかと思ふと、それが悲しくなつて堪らないのだ。少年の泣き聲を聞くと、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「そいらのせいぢや

な――いと、三年烏のせいだ――

と、各々がやがや言ひながら教會を出て行つてしまつた。其の聲と、打ち濕つた地を踏んで行く跫音とが、微かに夢のやうに消えて行くのを聞いて居ると、引き寄せられるやうな、うら悲しいうつとりとした心持ちになつて來て、他愛もなく戀しくなるのであつた。

四周はもう暗らくなつて、さつき散々惡少年の爲めにむしり取られた枇杷の木は、しよんぼりと其の中に佇んで居て、ばさばさした葉が愚かしく何か物を少年に言ひかけでもするやうに時々葉を顫はせるのであつた。

涙に濡れた目を上げて見ると、教會の尖塔は高く黒くぼんやりと搖れ映つて、靜かにぢつと見入つて居ると、音も無く不意に少年の方に倒れかゝつて來はしないかと思はれた。

朽ちかゝつた建物に耳を當てゝ見ると、ひいやりした冷たさが耳に傳はつて、かすかな微かな或る言ひ樣の無い不思議の囁きが絶えだえにするやうであつた。少年は思ひもかけぬ時に、今まで知らなかつた怪しい教會といふものゝ目に見えない秘密と憂愁に出會ひでもしたやうに、ぞつと身を震はせた。

少年の目には、黒い冷たいひつそりとした建物が恰も、少年を此處からもう逃がし出さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない様に、だんだんと周圍から推し寄せて來るやうに映つた。

急に皆が戀しくなつた。

をいらの

せいぢやない――と

此の聲が耳の底の方で、少年を、をびき寄せるやうにして居る。

「あら、まだ其處にいらしつたの！」

驚いて振り返つて見ると、其處には先刻皆の隱れて居たところを敎へてくれた少女が立つて居るのであつた。少年は何と云つたら好いだらうかと當惑して居ると

「何をしていらつしやるの」

と又聞いた。

「俺、何にもしてゐやしない」

少年はもつと何か云はふとしたが、濡れ萎れた椿の花びらが上顎にぺたりと吸ひ付いて居るやうでこれだけしか言へなかつた。

「さう、私と一共に歸らなくつて」

「うん」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

柔らかな温かい手が少年の手に觸れた。少年は闇の中で其の白い顔を穴の明く程ぢつと見入つた。二人はうす濕つた敎會の裏庭を拔け出た。そして肩を並べて話しながら歩いた。

「此れからもう彼麽惡い人達と遊ぶのはお止しなさいな、そして私と遊ばなくつて」

「厭だ、女と遊ぶと可笑しい」

「だつて、私があなたのお姉さんになつてあなたが私の弟さんになれば、おかしか無くつてよ」

少年は餘程こう言はうとした「けれど俺の家は貧乏してるもの」

實際少年の父は或る官省の小使をしてゐるのであつた。其麽者の子と海軍大佐の令嬢とが姉弟になるといふことは、少年の目から見れば寧ろ權衡の取れない、恥かしいことに思はれても仕方が無いのだつた。何時迄經つても、少年は何と返事をして好いのか分らないので、ただ默つて少女の後について行つた。

「姉弟になるのは、あなたお厭？」

かう重ねて聞かれて見ると、少年は益々當惑して了ふのであつた。

「それだつて……」

「いゝわ、若し皆さんがあなたを意地めたら大井（書生の名）さんに云つて打つてもら

うから、そんなら好いでせう、ね。」

少年は無理やりに弟にさせられてしまつた。何だか嬉しいやうではあるけれども、此れが鐵造に知れたら今迄よりもつと非道い目に會されるに相違ないと考へると、何だか取り返しの付かない事をしてしまつたやうで恐ろしくなつて來た。それで少女の家の門の前に來ると、少女が

「また、あしたの晩」

と言ふのを耳にもかけず、家へ駈け込んで、暫らく息を殺して居たのであつた。

三

少女は秀子といふのであつた。松太郎よりも一つ年上の十五である。――何時も少年が皆から鬼にばかりさせられて、理由も無く蹴られたり打たれたりするのを好く戸外で見て可愛相に思つて居るのであつた。漸く少年が鬼になつて見付け出せば出すで、

見付け、とつつかまい――

と言つて今度は捕へなければならなかつた。不具な彼に取つては普通の者の樣に敏捷に走ることは出來ない。動もすれば、よろよろとして前へ淳りそうになる。そして皆が巫山戲

ながら面白そうに彼方へ逃げたり、此方へ避けたり、或時は後から來て反對に彼を突き飛ばしたりして居るのに。少年は一生懸命になつて皆を追つて來るのであつた。それを又少年等は可笑しがつて、彼に追ひかけられるのを喜こぶのであつた。

其麼時の首を出來るだけ延ばして、切なそうに息をしながら大勢を追ひかけてゐる、見じめな、淺猿ましい姿を見ると、秀子は、最早堪まらなく、いらだたしく哀れになつて、思はず家へ逃げ歸つてしまふ位であつた。何故たつた一人の弱い不具を、皆して蛇のやうに執拗く意地め廻はすのだらう。少女は皆が憎くてならなかつた。彼女は少年の代りに自分が鬼にならうと決心したことは幾度もあつたけれども――。

少年の爲にこうして秀子は眞底から同情してくれる一人の慰藉者であつた。

松太郎は毎日彼女と顔を合はせて行くうちに、だんだん其の懷かしい潤ひをもつた優しい目の力に引かれて、今では少女の顔を一目でも見ずに居るのをつらく淋しく思ふやうになつた。

尖つた蛇のやうな冷たい母の目に睨まれるよりも、髪の毛のたわたわとした少女の優しい小鳥のやうな目に微笑まれる方がどんなに樂しく嬉しいか分りはしない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少女は何とかして松太郎を慰めてやりたかつた。駝背ではあるが、色の白い美しい顔をした松太郎を何うかして出來るだけいたはつてやるやうに努めた。けれども嚴格な父の目を盗んで、餘り夜遲くなる迄遊んで居ることは出來なかつた、せめて夕方、散歩しに行くといふのを口實の下に、少年と會つて、敎會の邊りを、鐵造の仲間に見付からないやうにして、他愛も無いことを話しながら肩と肩とを擂り合はせて歩き廻るのがせきの山であつた。こうして二人は既に離れ難いものゝやうな間柄になつてしまつたのである。

敎會の裏通りの夜の暗らさは、思ひもかけぬ恣な心を、ふと少女に起させた。生理上の變調期に置かれた少女の肉體に起る烈しい慾望は、或時は露骨に止み難きものとなつて表はれずには居なかつた。其ういふ時に、たわたわした少女の髮の毛は殊に甘つたるく纒はるやうに匂ふのであつた。

然し其れも見てゐる間に日向葵の花が明るくなつたり蔭つたりして様々にうつり變つて行くやうに少女の肉體に起る慾望も消えたり顯はれたりした。駝脊に對する少女の最初の心は今では次第に薄く消えて行つた。そしてある他の心持ちに支配されるやうになつた。………

二人が何日ものやうに敎會の裏通りを拔けて歸りかけやうとすると、後から少女の家の

女中が忙しく駈けて來て

「まあお孃樣何處へ行つてらしたんです、どんなにお探ししたか知れません、早くお歸り下さいまし」

と言ひながら無理に少女を連れて行つてしまつた。

少年は、ぼんやり立つて後を見送つて居たが、俄に寂しい寄りどころの無い心持ちに襲はれた。

何時までも、いつまでも其處に佇んで動かうとはしなかつた、涙が、冷たい涙が頬を傳ふて落ちた。

翌日の夕方、少年は彼女の家の前へ行つて見たが其處にはほゝ笑んで立つて居る少女の姿を今日は見ることが出來なかつた。矢張り自分のやうな賤しい貧しい者の子と遊ぶことを禁じられたに相違ない。――

色々と考へながら、少年は何日も皆の集つて居る駄菓子屋へ來て見た。店の椽臺には、出たての青い葡萄を啜りながら、腰かけて大勢ががやがや言つて居たが、駝脊の姿を見付けると、

「をい、松公、お前布田の女の子と遊んだらう」

と浴びせた。

「うそだ」

「隱したつて駄目だい、俺ちやんと見たんだ」

「うそだい」

「馬鹿云ふない、お前なんぞ不具の癖に……」

「此れから、彼麽女と遊ぶとしつぱたくぞ」

少年は別に反抗するといふ程の心持ちも無く、唯餘りの腹立たしさに、

「遊んだつて何うだつて俺の勝手だ」

と、かふ言ひ捨てゝ行きかけた。すると鐵造が後から駈けて行つて、

「生意氣言ふない、泣虫め！」

と言ひざま、突然、松太郎を突き倒した。

暫らくして起き上つた少年の鼻や口からは、どろどろした血が止め度無く流れ落ちた。

後では皆の囃し立てる聲がどつと上つた。

四

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

僕と遊んでくれるものは、もう誰れも居なくなつた。眞實の一人ぼつちになつてしまつた。

迷藏の仲間にも入れられず、少女は少しも姿を見せない。迷藏の仲間に入れてくれないのは、結局鬼にもされず、澁くつたと云つては泣かされもせずに濟むことなんだから、却つて好さそうなものであるけれども、そうして仲間はづれにされるのは、泣かされるのよりもどんなにつらいかも分りはしないのだ。

少年は河岸の柳の影に來て、取り止めも無く一人で物を思ふやうになつた。騷がしく飛び廻つてゐる皆の樂しげな聲を、離れて此處で聞いて居ると、無暗に皆が羨ましくなつて、ひしひしと悲しさが身に襲つて來る。

けれども少女が姿を見せなくなつてからは、此の淚といふものに、何れ程慰められて來たか知れない。一人ぼつちだとか、淋しいとか、さう云ふ其の時々の短氣な感情が、どの位淚のために柔らげられて來たか知れない。と言ひはするもの丶、いくら泣いても、泣いても、矢張り一人ぼつちでは淋しく賴り無くてならない。

こう云ふ時に屹度、少年は死んだ姉のことを思ひ出さずとは居られないのである。姉は十七の時に赤痢で死んだのであるが、今せめて其の姉が生きて居てくれさへすれば、どん

なことにも我慢をすると考へた。

――其れは未だ少年が五つ位の時のことであつた。ある秋の日の暮れ方、姉と落葉を拾ひに、澄松寺に行つたことがあつた。落葉は、鐘樓の後の籔の中に一番多く落ちて居るのであつた。姉が用意して來た目笊の中へ一つぱいになるのを樂しみにしながら、其の籔の中をあちこちと探し歩いた。落葉を踏むとがさがさとまた或時は忍ふやうにかさかさと鳴つて丁度それには秋の魂の籠つて居るやうに思はれた。黄ばんだ日の光りは、もうたわいも無くなつてしまつて、よく見て居ると、その弱々しい光りは落葉から吐き出す溜息のやうに煙つてゐるのであつた。鐘樓の上で烏の聲がする。

姉と少年は、敷き積つた落葉の上へ、がさつがさつと時々落ちて來る逞ましい青い刺のある毬栗を拾ひ取つて目笊に入れるのを樂しみに、とつぷりと日の暮れてしまつたのも、氣が付かなかつた。

かさ〳〵と人の忍んで來るやうな足音がするので少年が振り返つて見やうとすると、突如、後から少年の喉を締めた者があつた。驚いて「姉さん」と呼ばふとしたが、苦しくて聲が出ないから力限り身體を藻搔いて、

「あ――」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と叫んで見た。

やがて姉が飛んで來た時には、もう誰も其處には人が居なかつた。無論それは誰れであつたか、二人に分る筈が無かつた。苦しげに泣きながら少年は、姉の背に乘せられて急いで鐘樓の裏を拔けて家へ歸つて來たことがあつたのだつた。………

今になつて此のことを考へると、其の時の男は父親ではないかと思はれる節もある。けれども若し父親であつたとしたら、何故に其麽殘酷な眞似をしたのか一向分らないのだ。

少年は其れから其れへと、色々のことを考へ出すと、もう一層のこと此の堀割に飛び込んで死んでしまひたくなるのであつた。

それはもう木枯を思はせるやうな寒い風が、哀しく障子に鳴る時分となつた。

こうして河岸の柳の影に佇んで見ると、何も彼もさびしげに、さゝくれたやうに荒んで見える。先達まで騷ぎ廻つて居た少年達の姿は何時の間にか見えなくなつてしまつて、ひつそりと蟋蟀の鳴き止んだ後のやうだ。

僕はたつた一人で、しよんぼりと教會の尖塔を、あかあかと照る夕日の中に見上げて居ることもあつた。迷藏をして遊んだ時に仲間の隱れた場所へ行つて見て、去りがてに邊りを眺めて居ることも珍らしくなかつた。

斯うして毎日、僕は、何かを尋ね求めて居るやうな目なざしで彼方へ行つて見たり、此方へ來て見たりして居るのであつた。（一九一二・九・二三夜）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死の前 ——荒木郁——

『もう起きませんか。』木下は閉め切ッた薄暗い部屋の中に薄ラシャの單衣物に、同じ羽織を上から引掛て女の枕元に座つてゐた。太い白縮緬の帯に重さうに纏みつひてゐる金鎖からは、美くしい光が流れてゐた。

お里は、男の立派な風姿を、無心にぢろ〳〵と熟視てゐた。帯——着物——金鎖——

『起きませんか。』男がも一度笑ひながら繰返した時に彼女は始めて我に返ッたやうに、冷たく据つてゐた眼が解けた。頭をぐいと擡げて何か云はうとしたが、壁にかゝッた自分のしなだれた、白ッぽい小紋更紗の袷を見て、厭な氣がしたので止た。そして、寢返を打ちながら、

『えゝ起きませう。』

後向に海老のやうにくるッと丸く縮まッて兩手を顏に押あてた。それは、何を見るのも、聞くのも厭だといふやうに。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晩春の朝の光線がけだるさうに雨戸の隙間から末廣がりに射し込んで何やら讀み難くさうな掛物の文字の上を這ッてゐた。

此衣の襟の間から無邪氣な子供のやうな美くしい眼が光ッた。お里は、側に木下のゐることいふことも、又自分が、今どんな嫌な思をしたかといふことも、忘れたやうに、否、全然別人のやうに、和らかくニコ〳〵と爛ッてゐる朝日の光を嬉さうに見てゐたのである。而して、そッと、怖いものでも觸るやうに朝日を手の上に掬ッた。光は手の底を辷ッて向ふの襞にちら〳〵と逃げる。彼女は面白さうに釣り込まれて、一本一本の指先を光に接吻させて、段々に二の腕あたりまであらはに袖をたくし上げた。光は、細いお里の手を倘ほ細く、白く、美くしく見せた。恰も臘細工のやうに美くしく見せた。

『奇麗！奇麗！まあ世の中にこんな奇麗なものが又とありませうかねえ、眞個に、人間の生きた肉は奇麗だッていふことはこれを見ても分るわ、光てゐるわ、そしてまあ、この色……………ねえ、木下さん、あんまり奇麗なので、これが自分の手かしらッて云ひたいやうですわね。御覧なさい、光ッてゐますの、ほら、指と指との間にね、濃い紅い色がありませう。オレンヂのやうな、玉子色のやうな、ね、…………、…』

子供のやうに、我と我が手を叩いては嬉さうにまち〳〵と幾色かに見えなされる光の糸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を手繰ッてはほぐすやうにした。

『奇麗ですね。』

態うは答へたが木下は、彼女の美くしさ、光の色なんかを讃美する人ではなかッた。そッと彼女の手を握らうとした。お里は吃驚したやうに、木下の方へ向き直つて。

『ぶちこわし。』

『ぶちこわし?』

『毀れるぢやありませんか。』

『何が……』

『何もかも……』お里は悲さうに男を見上げた。

『貴方、殘酷ですわ。ねえ考へて御覧なさいませ。美くしいものは毀れ易いものですわ。そッと、そッと遠くの方から優しい心持で愛してやることはお出來になりませんの。』

お里の眼には、怒りと悲しみの泪が溜ッてゐた。

『志村さん。私そんな心算ぢやないッていふことは貴女に分るだらうと思つてゐたのに。』

『私そんなことは分りませんわ。そのお心算でなくッたッて、なさりかたが、、ないのですもの。』

あまり奇麗だツたのでそツとして置くことが私には出來なかツたのです…………だけど、私の仕やうとしたことが貴女の機嫌を害ねたのなら謝ります。けれど…………そんなに惡いことでせうか、貴女が口惜しがる程、貴女が泣く程。貴女の例も仰有るのに依りや熱情ツていふことは貴い筈ぢやないんですか。』

『お止しなさいませ。あんなことは熱情ぢやありませんわ。卑しいことですわ、卑しいことですわ、あんなことは、美を慕ふことの出來ない人のすることですわ。凡ての美しいもの、あの詩だとか、音樂だとか、畫だとかね、あゝいふ和らかなものを眞個に心から愛することの出來る人でなけりや、熱情だの何かツていふ資格はありませんわ。』お里はこゝまで急ぎ込んで云ツたが、何を思ひ出したのか、ふと、顔を赤めて、小聲になツた。『だけど、私、もう〳〵そんなこといふ資格なんかないんですわ、私にだツて何にもありやしないのですわ。これはもう私の身體ぢやないたゞ一切の肉なのだもの、頭も心もなにもない肉、それツきり、それツきり。ね木下さん。さうですわね。それツきり。』

木下は無言のまゝ苦笑して枕元のオリエントの箱から一本引ぬいて火をつけて女の手の上にをいた。お里は無心な煙が夜具の袖を傳ツて、ふか〳〵と立上ツて天井に縋り付いてゆくのをぢツと眺めてゐた。

どこらからか、唱ひ馴れた鶯がちぎれ〳〵に聞えた。子供の頃の遠い記憶がぼうと夢のやうに彼女の頭の奥に展けた。麴町の古寺のやうなガランとした生れ家——二棟に分れてゐたあの廣い家は何代かの彼女の血統を分けた人々の生れた所でもあり又、その人々の最後の訣別をつげた所でもあつた。黑光のする古いゆがんだ柱は太く立派なものであつた。二棟に分れた家を續かせる爲めに洒落た太鼓形の橋があつた。橋の下には細長い水溜があつて中庭の池に續いてゐた。

池は小舟を浮べることの出來る程廣かつた。池の周圍には、松葉牡丹が一ぱいに敷きつめられてあつた。

暗い廣い臺所は通常の日は誰も這入らなかつた。何か親類内の祝事か不祝儀なんかの時には、家へ集つて、その臺所には料理屋から、料理番が來て、彼是する位であつた。とも角家の中の半分は用のない部屋であつた。

彼女はこの廣い家の一人娘であつた。欲しいといふもの、見たいといふもの、何の不自由もなかつた。然しそれは長い間ではなかつた。お里が十一歳の春、彼女にとつて、忘れることの出來ない哀しい事件が突然起つたのである。

春の夕方であつた。彼女は例もの通り學校友達の誰彼を誘つて、庭の池に小舟をうかべ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、散つてくる櫻の花瓣を小さい手に受けては、放ち、友のさげ髮や肩の邊へかゝるのを面白がつて笑ひさゞめいてゐた時であつた。奧の方で俄かに騷しい物音、人聲が聞えたかと思ふと、父は、後手に結ばられたまゝ、多人數の警官と一緒に家を出たのである。父はそのまゝ歸つては來なかつた。朝に晩に、彼女は神に祈つた。其後時々警官や裁判所の人々が來るけれども彼女の父は終に歸らなかつた。父の知已も、友人も始めの中は何かと世話をやいたが、二三ヶ月もたつと忘れたやうにその人々は來なくなつた。その年の秋に母は病死した。お里は、此時、眞に世の中のかなしさ、怖しさを知つたのである。窶れた母の枕邊で天も裂けよと彼女が泣いたのは、必しも母に別れる悲さ許りではなかつたのである。母は彼女の小さい手を握つて。

「お前のお父樣は無實の罪で獄に這入つて被在るの、獄とはね怖ろしい、汚ない所なの、けれどもお父樣はどうすることも出來なくつてその厭な所に被在るのよ、お父樣はお前の知つてゐるやうに大變に偉い好いお方なの、世の中には間違といふことがあつて、惡くない人も惡い者になつたり、惡い人が善い者に世間から間違ひられたりすることがあります。お前は立派なお父樣、親切なお母樣を持つたのだから、それだけをせめて幸福と思つて、お父樣と一共に住めないことを哀しんではなりません。お父樣は眞個に不幸な方であ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つたから萬一も、お前が大きくなつて、御父様がお歸りになつて、一共に住むことが出來るやうになつたら愛して上げなけりやいけません。例へ世間から誤解されやうとも自分の信じないこと、いけないと思ふことはしてはいけません。それから克己といふ言葉をお守りなさい。』

長閑な彼女の胸は、いぢらしくも此時、ふみにじられたのである。疑惑、不安、この種は此の時に蒔かれたのである。

お里は、母の死よりも、生ある父の上を哀しんだ。

『何故お父様は死なゝいんだらう。』

と、子供心に考へた。そしてそのまゝ朽ち果てる、暗い影のつきまとつたる父親の姿を偲んでは泣いたのである。

母の死と共に彼女はすつかり大人びて了つた。百ヶ日が過ぎると家や邸は凡て親類の人々の取計で人手に渡つた。そんな細々した後始末がつくと共に彼女は、幼時から世話された婆やと一共に小柄な家を借りて、小學校から女學校商業學校と轉じた。が此の學校を卒業する頃にはもう、お里は安閑としてゐることが出來ないやうな境地に立つてゐた。もつと、有るべき筈の財産は、何時の間にか消えてゐた。親類中の誰彼は皆、立派になつてゆ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くのに、たつた一人の彼女は朝夕の食事から一切萬端を全然、我と我が手に托さねばならぬやうな仕儀になつたのである。諸式の儉約から長年一共に住んだ婆やも宿へ下げて、植木屋の小さな離室を借りることにした。そして、毎日銀座の或る商館へ通ふ身となつたのである。木下は此商館の上得意であつた。彼が地味な容姿をして、誰彼となく愛想よく振まくことは館員一同から、少なからぬ滿足と賞讃とをひいた。又彼はよく商人に有りがちな下卑な話や調子高の物云ひを避けてゐた。殊に婦人の前には細心であつた。中には彼が未だ獨身者であるといふのを聞いて内々氣を引いて見た女店員もあつたとか云ふことである。こんな風に友達や他の者が騷ぎをするのを、お里は可笑しいものでも見るやうな氣持で、遠くから眺めてゐた。

『あんな男、どこがよいのだらう。』お里はいつもかう思つてゐた。こんな風に思つてゐたのではあるが、彼女はいつとはなしに他人に秘密で彼と往來をするやうになつた。彼に連れられて今迄知らなかつた世界をいろ〳〵見聞するやうになつた。商館がひけると彼女はすぐに街角や、停車場なんかで男を待合せるのである。二人は夜の街を肩を並べて嬉しさうに歩き廻つた。時には所謂『赤電車』に乘る程遲くなることもある。

男は兎に角、女は夢見るやうな心持があつた。

併し、木下はいつまでも彼女との交際を、此程度に置いてはゐなかつた。洋食屋から、料理屋、料理屋から待合といふ順序にずる〳〵と連れ出した。彼女はいつも馴らされた小鳥のやうに柔順しく男の後に、跟いてゐた。まだ女の總てが男のものではなかつたが、此頃から彼女の性格に著しい變化を來たしたのは爭はれぬ事實であつた。

『昨夜はよく眠づて?。』木下はけだるさうに投げだされたお里の指先にくちづけをして、固く握りしめた。『あッ!。』お里は手を引込まさうとしたが、脆くも男のものになつてゐた。左手のオリエントから灰が、はらりと落ちて、男の手の上に散つた。

『よく眠つた?』

『えゝ。』かう答へたお里の眼は泪に、にじんでゐた。疑惑、不安、彼女の胸は荒繩にしめられたやうに、くるしく、切なくなつた。煙草から吐き出される煙が、ゆら〳〵と凝り固つて、幼時に分れた父親の顏になつてゆく。長い間日の目を見なかつた父は、げつそり瘦せて、眞白な鬢がいきぐるしいまでに亂れてゐた。

『お父樣許して下さい、お父樣、お父樣。』

彼女は聲を立てゝ泣いた。

『眞個に私がみんな惡いのです。惡いと思ひながら、お母樣、許して下さい。』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

足を掛布團の上へ乗せて俎の上の魚のやうにばた〳〵やりながら自棄に頭を振つて指を髮の根元へ突込んでがり〳〵掻いた。それでも氣が濟まないといふやうに、浴衣の袖口を糸切齒でぎり〳〵引裂いた。木下は驚いてお里を抱き起さうとした。

『奈何して、奈何して。』

『いゝえ、いゝえ、構はないで投つて置いて下さい。私は、私は、世界中の女の人の價値を下げるやうなことをしたり、自分の世界を低めてゆくやうなことをしたり、お父樣や、お母さんにごんな濟まないことをしたか知れやしないんです、惡人なんです。え、惡人です。心の弱いものは、惡人です。自分の眞個の心も考へることの出來ない、自分の思ふことが分らない人間は惡人です。こんな惡人!』

長い沈默は二人の間に續いた。お里は今考へてゐることを、も一度考へ直さうと眼を閉つたが、其時はもう駄目であつた。男の不安さうな顏、自分のみだらな姿、昨夜から下げ殘しの德利や小鉢などが閉つた眼蓋を引あけるので、苦しさうに涙ぐましい吐息をして起上つた。が頭の重さに堪えかねるといふやうに、ぐたりと、首を床の上に突伏すと、『これ位のこと、心配しないでもよい、誰れでもがすることだ!』と頭のごこかで叫んでゐる。木下は雨戸を一二枚くり開けて、階下へ降りて行つた。

『まだお寢り遊しますか。』ふと見上げると、女中が箒を背後に廻して敷居に右手を突いてゐる。お里は返事をしないで立ち上つた。そして部屋の出頭に木下から渡された濡手拭を手に搦めながら洗面場へ下りて行つた。

『私、奈何しませう。又今日も休むことにするより仕方がありませんわね。』

『でも今からなら間に會ひませう。』男の返事がお里には大變氣に入らなかつた。厭だとか哀しいとか、憎むとか、云ひながら、思ひながらも矢張り彼女は木下を愛してゐたのだ。離れたい、と思ふ心の底には何時も、離れられないといふもつと強い思が蹲つてゐた。

『私平氣な顏してこれから直ぐに商館へ出られると思ひなさつて?………あの種々な男や女の澤山ゐる中へ、併も明るい太陽の輝いてゐる街を通つて……。』

『ぢやお休みなさい。たゞ私は貴女が例もお休みするのは厭だつて云ふからさう云つた迄で、止すのなら私は尙ほ都合が宜い筈ぢやありませんか。』

『僞許りッ、私が休むと又貴方の信用とか何とかいふものに係るつて心配なさるのでせう。』

『志村さん、そんな事を云つちやいけない。私何時そんなことを云ひました。』

『大概、それ位が落でせうと思つて、…………だけれど私、もう二度とこんな處に來るものですか、屹度もう來ません。』

『何故?』

『私何だと思つて被在るの?』

『何つて別に、貴女何か誤解して被來るのぢやないんですか。』

『だつて誤解と知つて誤解する者もありますまい。』お里はかう云ひながら前のかき餅を一つ二つ摘んでから、いら〳〵して堪らないといふやうに、立上つて、部屋の周圍を歩き始めた。

『あらッ』大袈裟に驚いた表情をして、笑ひながら、紙切を男の膝へ投げつけた。それは『ばかだよ』とかいてある辻占であつた。

『何だくだらない。』

『何がくだりませんの、何が、何が、ねえ、當つてゐるぢやありませんか、私のおみくじには眞個に相應しい。私生れて始めてこんな家へ來ましたの、私のやうな大莫迦でなけりやね、私のやうな、私のやうな………』

かき餅を固く摑んで男の膝へ投げつけた。此時女中が襖を開けて手をついた。鳥渡たぢ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろいだが、すぐに。

『お賑やかで厶いますのね。ホヽ………あの奥樣、お倖が參りまして厶います。』木下は笑ひながら『有難う。今御孃さんかおむづかりで。』と云つた。お里の眼は、きり〳〵釣上つて自分ながら顏の四角張つてゆくのを覺えた。女中が襖を閉める時、お里は又も一摑み男の顏へ宛てゝ投げつけた。女中の足音が梯子段の下に消えた時男は、

『貴女落着かなけりやいけません。女中の足音が梯子段の下に消えた時男は、』

『貴女落着かなけりやいけません。見つこもない。此所へ來たのが厭だつたのならさう口で云つたらいゝぢやありませんか。私何も、無理に連れて來たのぢやないんです。一つでも私は勝手にしたことはありません、さうぢやありませんか。』

お里は優しい母の話をきく子供のやうに、柔順に笑つて頷づいた。そして早く此家を出やうと云つた。かう云つた時の彼女は優しく亂れてゐた。靜かに自分の部屋に歸つて、懷しい、和らかな部屋の匂を胸一ぱいに吸ひ込みたいやうに思つた。そして父の事、亡き母のこと、又現在の自分のこと、木下のこと、何もかも凡てを靜かに落着いて考へたいやうな氣になつた。

木下はお里のいら〳〵する心持を奈何して慰めてよいのか分らない、只彼女の云ふまゝに、直ぐに各自の家に歸ることにして二人は、右と左に別れた。

家へ着いた時、お里は身も心も綿のやうに、へと〳〵に疲れてゐた。部屋に這入るが否やぐつたり寢そべつて、煤けた天井を見守つた。そこには、母親の胸のやうな暮しさと共に、父の眼のやうな鋭さとがあつた。此夜からのいやらしいみだらな自分の姿を、思ひ出しては、ぢつとしてゐられない程悲しくなつて來た。

『此分でゆくと、まあ！私はどんなに墮落するか知れやしない。』

お里は怖れ戰いた。眞個に愛してゐるのだかどうな判然わからない彼の自由になつて、彼の犬でゞもあるかのやうに、木下の眼の色なんかを案じたことなんかゞ今更のやうに口惜しくなつて來た。

木下は世間體を粧ふには種んな手段を用ゐる。それが爲めに、二人とない情人のお里に迷惑もかければ、又惡口もいふ。然し、こんなことは、木下自身にとつては惡いことだとは思はれなかつたのである。世間體を粧ふといふことは、情人間の幸福でゝもあるかのやうに思れてゐた。が女の卒直な、心にはそれが氣にゐらないものゝ第一であつた。彼女は、何もかも有りのまゝ見、有りのまゝ聞き、話すと云ふ性質であつた。彼女は多くの不幸に出遇つたが爲め反つて、世間に對して大膽であつた。で木下が友人と話す時にお里のことを、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あの女ですか。あれは〇〇商館の館員です。あの商館には私も少し關係がありますので、ちよいと知つてゐます。』

『でも大變にお近しいやうですが可成面白いお談があるんでせう。』とか何とか戲談を云ふ友があると彼は眞劍になつて。

『戲談ぢやありませんやね。私はそんな子供めいたことをする年配でもありませんからね。』

と、答へるのだ、こんな氣持の惡い言葉を用ふ人と知りながら、お里は彼と離れることが出來なかつた。何故別れられないんだらう。あんなにされてまで、あんなに卑しめられてまでも………お里は我身の不甲斐なさを、しみ〴〵哀しんだ。我と我胸を挽つて挽つてそのまゝ呼吸も絕へよと叫だことは幾度あつたらう。そんなに叫びながら、思ひながら、彼女は、男の側に一足、一足と進でいつたのである。

お里は朝から何も喰べなかつたので身體の肉が竹の子の皮をむくやうに、一切づゝそがれてゆくやうな氣がして、賴りない氣持になつた。胸の邊を觸ると、思做しかげつそり瘦せたやうだ。立ち上らうとすると頭がふら〳〵して、上から大きな重い物が、落ちて來る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やうで、譯もなく怖ろしくなつて來た。何か、大變な事件が起るやうな氣がする。

彼女は、唯自分の身體一つを部屋に投げ出してをくこいふのが恐ろしくなつて來た。ぢつこ疊の縁に嚙り付いてゐるこ、脊中から、額から、冷めたい汗がじく〳〵こ流れだす、氣味が惡いので、汗を拭かうこ思つても、手が動かない。我こ我身が石像のやうに固つたのぢやないかこ思れる。

『志村さん、まあ、貴女お晝上らないで、お氣分でもお惡いんですか。』

宿の内儀さんが夕飯の支度にこ火種を持つて來た。

『えゝ、私少し熱があるやうですの、醫者を呼びにやつて下さいませんか。』お内儀さんは親切に彼女を床の上に寢かして、出て行つた。

頓て醫者はお内儀さんこ一共に這入つて來た。氣弱なお里は、醫者こは、可成長い間の知己かなんぞのやうに親しく物の云へるやうな間柄であつた。醫者は、容體もろくに訊かないで診察をした。大したここはないこ云つたが、直ぐに看護婦をよこすこ云つて歸つた。

病氣になつても、誰一人に看病されるのでもなく又、誰一人が心配してくれるでもないのを哀しく思つた。けれごそれは例ものやうに悲しく泣かれるのではなくて、調子づいた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話をつゞけるやうな輕い自棄な、かなしみであつた。
身體を空に釣り上げられるやうな氣がしたかと思ふと、深く地の底へすべり込むやうな氣がする。果しなく地獄の底へ落ち込みはしないかとお里は敷布團の端を力一ぱいにギユツと掴でゐた。手を離すとそのまゝ死の手に渡さらるやうな氣がしてならなかつた。それで、彼女は、かう呟いてゐた。
死んではいけない、死んではいけない。自分は未だ若い。自分の身體はちつとも汚れてゐなかつた。自分獨りの身體であつた。それを、それを、私は盗人にあつたのだ、私の心を盗んだ人がある。そして、私の身體をも盗だ。私は取りかへさない中に死ぬのは厭だ。取戻さなけりやならぬ。その人から取戻さなけりやならない。私は死ぬ前に彼を殺さなければならない。私は死ぬ前に彼を殺すのだ。取られ放しぢや厭だ。取戻すのだ。取戻すのだ。
彼女の呟く聲は、囈言のやうに枕邊にゐる人々にはちつとも分らない。看護婦と、木下は彼女の枕邊に座つてゐたのである。二人はお里の苦しさうな聲の度々に、彼女の面を見た。煤けたランプのホヤから溢れる鈍い光線は彼女の顏を一層青く見せる。
寂つそり更けた夜に犬がけたゝましく吠へる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

隣家の鶏小屋からチャボが二聲續けざまに鳴いた。彼女は血走つた眼を開けて、木下と看護婦の顔をまぢ〳〵と見た。

『お里さん、私分りますか、木下です。』

『氷…………』彼は小さいかけらを彼女の赤黒く乾いた唇に含せた。

此の時看護婦は靜に獨語のやうに、

『厭でムいますね。鶏が夜鳴を致しました。』

――完――

旅に行く ―尾鳥菊―

旅に行く、私は旅に行く、何處へ行くのだらう？何處だか分らない、我行く先を自分でも知らないのである。

あゝ明日からの私！明日からの私は東京を離れて、獨りで何處を彷徨き廻るのだらう？何處を見ても重い雲の垂下つてゐる諒闇の秋に、私はひとり旅に出て、思ふさまより以上の寂寞を味はうとしてゐる、私は一體何を求めてゐるのだらう？

昨夜も寢床へ入つてからつく〴〵考へた。こんな靜かな晩、一枚々々枯れて逝く梧桐のわくら葉にしめやかに降濺ぐ村雨の音を聞きながら、いつまでも自由に物を思つてることの出來得る、かうした平和な朝夕を過してゐて、何故此上の寂寞を求めやうとするのだらう、と。

私の周圍には誰もゐない、私の書齋は私ひとりのものである、何を爲、何を考へてゐようと、誰あつて干渉するものがない、それほど私は精神的に自由な生活をつゞけて來てゐる。けれども私が始終要求してゐる、私の藝術的氣分から起る心の絕對の自由――と云ふ

ここは、私の保守的境遇が然らしめた私の性格としては到底得られさうもない、それは單に空想に過ぎないのか知ら、と時に自分ながら焦冽たくなつて來ることがある。

あゝ、私は今旅に行く、何の的もなく只飄然として家を出て行くのである。單衣と單衣羽織と袷と袷羽織と帶と綿入を一二枚とコートとショールと手袋と、殆んど一年中に必要な衣類を持つて、そして飄然と旅に行く。

あゝ、私はいつ歸京つて來るだらう?

『親不孝者ッ』

と親の口から叫ぶ聲ほど、私の耳に不快に響くものはない、それは壓制を意味してゐる、少なくとも强請的である。

私はそれほど忌み嫌ふ言葉を圖らずも生れてはじめて自分の親の口から聞いた。私は私の耳を疑つた。

『私が親不孝者?私が親不孝者?』

私は到底自分が親不孝者であると云ふことを信じられない。性來內氣な、さうして狹量な私が、過去に於いて自分であゝ親不孝をした――と後悔するやうな行爲をした覺えが毛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頭ないのである。

それにも拘らず、私は俄然、

『親不孝者ッ』

と云ふ惡聲をはなたれた。私は其時體中の神經が一時にグーンと鳴つて、ビリ〳〵と激しく戰慄を來したほど腹が立つた。

『口惜しいッ、私はいつ親不孝をしたらう？』

齒を喰切つて暫く堅くなつてる中に、兩方の眼から自然に熱い〳〵涙がこぼれて來た。

『私は何故親不孝者と呼ばれるのだらう？』

私は只もう不思議で堪らぬ。

斯う云ふと人は或は私の事を「我」が強いと云ふかも知れぬ、何故もつと自分を振返つて見ることが出來ないか、と責めるかも知れぬ。けれど私は幾な過去を振返つて見ても、あゝ親に濟まないことをした、惡いことをしたと窃に冷汗を流すやうな後暗い事はした覺えがない、斷じてない。私は寧ろ親に對して滿腔の不平を抱いてゐる、親の愛情！親の慈悲！そんなものは少なくとも或意味に於て私は私の親から受けてゐない。私は親の愛情とか、親の慈悲とか云ふもののほど矛盾した曖昧な、手前勝手なものはないと信じてゐるので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある。

　けれども私一人をもつて、決して世間の親を律する譯には行かぬ。恐らく私などは此點に於いて、最も不幸な子供なのであらう。

　親に孝行をすると云ふことは、親から强ひられてはじめてするのではなく、子の方から勵んで爲すべき人間の義務であらう、けれど切角子の方から爲さんとおもひ、且つ爲しつゝあるに、頻りと親の方から强ひられると勢ひ嫌氣がさして來るものである、殊に此方で精一杯、それはもう汗水垂らして出來得る限り物質上にも精神上にも滿足を與へようと努めてゐるにも拘らず、傲然と構へて其不足を叫んだり、不能と罵られたりすると、血汐の湧き立つ若い胸が烈火のやうに燃えて忽ち破裂しさうになつて來る。

『誰がそんな不能な子を生んだ？誰れがそんな馬鹿に敎育した？』

　私は血走つた眼を眞空に据えて、血が滲み出るほど唇を嚙みしめてゐることが往々ある。

『これ以上はどうする事も出來ない。』

　と思ふほど、あらゆる辛苦と戰ひつゝ親のために盡しても、尙且つ不滿を訴へられた時、私は一體どうしたら好いのだらう？

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あゝ親！親とはかくまで子に無理が立ち通されるものだらうか？親の權力！親の壓制！私にとつてこんな怖ろしい言葉がないのである。

『親だから爲方がない、諦めなさい！』

それは一般の人の言ふことである。其簡單な一語の中には、どうせ親と云ふものは解らない者に定まつてるのだから、其積りで好い加減にあしらつておいたらよからう、と云ふ意味が含まれてゐる。

或はどの道親ではないか、子は親に絶對に服從すべきものである、服從しろ服從しろ、と云ふ意味にもとれる。

成程或程度までは服從もしよう、けれども私の最も悲しむのは、懐に無い物を出せと云はれる事である。

斯うなると幾ら藝術的の觀察をもつて冷靜に批評しようたつて、もう駄目である。

先で怒つた時に何故私は笑つてゐられないのだらう、私は自分が怒られることなんか少しもないと思つてるのに、向ふから怒つて來ると何だか不意打を喰はされたやうで非常に腹が立つ、そして先の卑怯をどん〳〵責める、責めた結果謝罪らせなければ承知しない。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だから謝罪るまではいつまでも責めてゐる。さうしてさて謝罪られて見ると、此度は自分の責め方があんまり酷であつたやうな氣がし出して、非常に氣の毒になつて來る。妹や弟に此手をやつた時、いつでも後で可哀想だつたと思つてお世辭をつかひ出す、私は何と弱い女だらう！

ところが私の親はいはゆる負けず嫌ひである、理が非でも一旦云ひ出したら決して後へは退かぬ、飾くまでも親の權力を振舞つて徹頭徹尾子供を壓伏しやうと企てる、當然謝罪つて可いだけ間違ひがあつても、到底謝罪りつこはない、子の前に頭を下げると云ふことは、親の權威を傷づけるものと心得てゐるから、假令心の中で自分が惡かつたと氣がついても、表面は白々しく苦しい楯をついてゐる、さうしてゐるのが即ち昔の武士道氣質であるとやらに信じてゐるらしい。

と、私は平素笑つてゐるのである、だから親の方で偶々理不盡な事を云つて怒り出して來ても、「又はじまつた」と思つて超然と構へて居ればよかりさうなものを、さて其時になると矢張り炎々と腹が立つて來て、どうしても默つてはゐられない、さうして自分の氣のすむまで悔し涙をこぼしながら追究してゐる。然し私の親は決して、決して、私の前では弱味を見せぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私はあの頑迷な親の頭腦をほごさうとして幾年苦心したらう、最近に於いて大分其功を奏したと悅んでゐたが、それは一時の事であつた、頑迷はいよ〳〵募つて近來殆んど手のつけやうがない。私は生きてる限り斯うして親の方から求め得られない或物を强請されつゝ迫害を加へられてゐるやうな氣がする。

私は親と云ふ文字を見たゞけでも、竦として寒くなつて來る、世の中に一番怖ろしいものは何だ?と訊ねられたら、私は屹度頑迷な親と答へるのであらう。

あゝ親!親とは子の前に親の名を利用して慈悲を愛情を賣物とするものであるまいか?

荷物が出來た、私はもういつでも立つことが出來るのである。

私の弱い心は、私が旅に出ようとする瞬間に、屹度殘り惜しいやうな淋しい感じに誘ひ込まれる。家から捨てられたやうな、自分から捨てたやうな、妙に矛盾した淡い淋し味を覺える。然しそれは玄關に下り立つた一刹那のことで、一度門外に踏み出して了へば、忽ちもうけろ〳〵として愉快な顏をしてゐる。さらして次から次と眼の前に展開さるゝ大きな自然の中に吸ひ込まれて行くやうに、すが〳〵とした好い心持になつて、昨日までの鬱憤を晴らして了ふ、旅は私にとつて最も偉大なる、最も崇高なる慰藉でもあり、又精神修養

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でもある。

私は私の家庭内に於ける愚にもつかぬ小さな葛藤の渦卷の中に卷き込まれて、共に泣き共に悲しみ、共に悶える女とさせられんことを最も虞れてゐる。私は其渦卷から脫れんとする時は旅より他に行く道がない、だから又旅に行く。さうして獨り靜かに物を考へたり、物を書いたりする。其間だけは眞に私の藝術的氣分を味へることも出來るのである。

さらば東京！私はしばらく旅に行つて來る、歸る頃は木の葉が悉く紅葉して、曉の街に霜柱が見えるかも知れない。

（九月二十日）

諒闇

—原田琴—

神にしてかくれ給ふと聞かじ聞かじ賤の老人
なほあるものを

涙もて泣くいとまなし眼を閉ぢて死せるがご
とくありしひと時

億兆の民の涙はかしこくも神のみすそをぬら
しまつらん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つむじにもまきあげられて中空に迷へるごと
し億兆の民

灰色に天つ光もかゞやくか暦の外の諒闇の秋

風吹くもあはれ此の世のゆらぐかとおどろか
れつる悲しまれつる

ほこりたるこの黑髪も身の限りかづく喪のご
と思はれて來ぬ

おぼえけり甲斐なきものに云ひなして男の前
に身を投ぐるこそ

一言を別れにのぞみわれいはん戀にかりたる
君なりしこそ

わがごとく君を思へる人ひとり他にあらぬも
時にさびしき

さきに醉ひさきに倒れぬその後は知らぬ少女
が君とありけん

ふと思ふ心のまゝにうちまかす旅の男の戀も
うれしき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さきのことはた後のこと問はずいはず女とばかり見てとり給へ

旅にする氣まぐれごとにあらねども別るゝ日のみ美しき戀

美しき夢つくさんと死ぬことを誓はであれば捨てられにけり

ふと思ひふと盗みゆくあさはかもいとまあらぬがうれしきものぞ

美しき戀の昨日はたのむべき暦の明日に少しまさらん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初秋の風が單衣をすける時わがさびしさの泣
かれぬるかな

別れたる人も思はずみづからもありと思はず
こほろぎを聞く

誰といひて一人をえらんゐまはりのこの賑か
さこのかゞやかさ

わりなくも初戀のごとよそへるをはつはつ咲
ける萩たをる君

行き暮れて宿り合ひたる二人かと虫なく家に
わびしき思ひ

進化上より見たる男女

――上野葉――

オツトー、ワイニンゲルは女性は全部性慾のために支配せられてゐる。即ち、女性――性慾であるが、男性は猶此外に精神慾を持つてゐる、性慾はそのほんの一部であると云ひ、更に女は男に比して、諸能力がすべて劣つてゐる。否、純粋の女性は、全く無能であると云つた。これは、單に、現在の事實のみを捕へて、本來のものとした妄論ではなかろうか。私は、女性の本能と云ふことについて、多年疑つて來た。そしてワイニンゲルの持論に類した説を、男から聞くと、いかにも女を馬鹿にしてゐると憤慨した。そして自分で自分を熟視した。生物界の原則を研究して見た。犬や猫は、雌雄共に其能力に於て差を見ない。むしろ雌の方が自營自活する上に、子を育てる手腕を持つてゐる。何して、獨り人間だけが、男と女とに能力の差を生じたのであろうか。果して、女性は、本來無能の動物なのであろうか。果して男性には、獨特の先天性があるのであろうか。

原人時代には、女の數は遙に男の數に劣つてゐて、所謂、多夫一妻時代であつた。で、男は妻を得むがために、女を誘惑する方便として、美髯を貯へ、征服者としての勇壮なる

氣象と、風采とを示して、充分に信賴するに足ると云ふ信念を買ふに汲々としてゐた。從つて、此時代に於ける女性は、夫を選擇する上に、放縱な權利と、自由とを持つてゐて、一度夫として定つても、若もそれが氣に添はなくなると、直ちに逃げ出して了ふ。今も、野蠻人中には、斯る風習の行はれてをるものがあつて、パタゴニア人は、必ず、相愛によつて結婚は成立する。若も、兩親が、娘の意志に反したものを夫に勸めたならば、必ず、是を拒否して、決して本意なき結婚などはしない。無理に强いられることがあれば、深く森に隱れて、男が追れ探索を放擲するまで、出て來ないとか。

斯る社會では、女が美の標準から見た、立派な男子で、よく、女子を防衛し、其生活を支へることの出來るものを選擇するしかし斯樣な男は、又、その最も好きな女を選ぶ上に、結婚と云つても、一時的のものが多いから、女性もやはり自營自活の手腕が要るから、淘汰は男女兩側に行はれて、能力の上に大差は呈して來ぬ。野蠻人とか、夫婦共稼の勞働社會とか妻の實力の豐な家庭等では夫婦の權利は殆ど同等で、むしろ一家の全權等は、妻の手に在るものが多いことは、今日も見る處である。漸次家族制度が固定して來ると動物は、子供を產み放しにして競爭場裡に出るが、人間はその子供を育てねばならぬ、家を守らねばならぬ、こんなことに當るのは、女でなければ出來ない。自然、女は終世男の保護

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を受け大切に奥の方に藏ひ込まれて生存競爭の風から遠けられて了つた、男は、一方に雌雄淘汰を受ける、一方には自然界同族間に於ける淘汰は益々進で來る遂にはたゞ腕力だけでは之等を征服することは出來ない。智謀を持つて陷れ、策略を以て防がねば到底追付かなくなつて智的方面に著しい發達を遂げ優者は其勝れた特質を遺傳して行く。此間、女は、たゞ成るべく、理想的男子の注意を惹くに足る美觀を裝ひ、男の意に從つて、生殖と云ふことさへ專問にしてをれば、危難は一つもない。云はゞ、女には、自然淘汰を受けることは至つて尠いから、男の樣に鬪爭の具もなければ、智惠も發達しない。兩者の能力に漸次差を生じて來た。且、又、男は、何うしても危險を犯すことが多い割合に、女は珍重がられ、大事がられてゐたので、死亡數が比較的男に多く、從つて男女の數に於て甚しい懸隔はなくなつて來る。

男が、腕に於て、智に於て、ズン〳〵發達して行くにも係らず、幸か、不幸か、悠々泰平の夢裡に、淘汰の鐵槌を免れた女性は、最早、到底、生存競爭場裡に、角逐するだけの能力はなく、數に於ても、互角の形勢、泣くも笑ふも、たゞ一途に、男性の庇護を請ふの止むなきに至つて、男の要求するが儘に、家を守つたり、子供を育てたり、ハイヘイと命維れ從ふ少羊となり下つて、かつては選者の權を振つた女も、些の抵抗なしに、無智蒙昧

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の奴隷ならまだしも、一夫多妻の悲境にも、沈淪せなければならぬ者も出來て來たと云ふのも、全く淘汰の結果で、女自身、男をタインラントにし、男自身、女を奴隷にしたのである。然しながら、前にも述べた通り、結果を見て、直にそは本來なりと云ふは、誤りである。近い例が我國平安朝時代には、幾多の才媛佳人が、有髯の男子を瞠着せしめ、堂上家には、女子の出生を希つたと云ふものは、これ全く、權門が、外戚の權を握らむためには、才花兼備の女を入内せしめなければならぬから、懸命に娘に學問をさせる、藝を仕込む。のみならず、其幕下には、當世の才女を多く集めて、聲價を張らねばならぬ。斯る要求を持つて居る時代では勢才學に秀でたものが、當時代の優味者である。當時の女子は、此自然淘汰を受けて、遂に空前の絢爛、花の如き平安文學を織りなしたのではないか。紫女、清女、共に時世の要求に投じたものであつた。ビクトリア女王は云はずもあれ、呂后の如き、武后の如き、將た、西后の如き、星の様な政客を率ゐて其手腕を振つたのも時の運である。男にも、女にも、先天納能力が定まつてをるのではなくして、長い間の雌雄淘汰、自然淘汰の結果、今の狀態になつたのにすぎなかろうと思はれる。

ワイニングルが、女性的男子、男性的女性のあることを確認したのは、即ち、淘汰を施せば、何うにでもなると云ふ意味に取れる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女は、戀愛が生命であると觀察せらるのは、從來の淘汰の結果であつて、極端に云つたならば、當然、女は生殖主任となつて、男を生活の方便に便つて遊でをればいゝ。智識も學問も要つたことではない。たゞ、美貌と、强壯とさへあれば、それで男を誘惑するに充分である。男の風采と、地位と、財産とは、女を誘惑するに充分である。しかしながら動物は、自然淘汰にしろ、雌雄淘汰にしろ、これを意識してをることは、殆ど稀で、たゞ、本能の支配のまゝに盲從してをるに過ぎない樣に見える。人間ばかりは、獨特の言語を使用し始めてから、知識が開發せられて、次第次第に、模倣、推理、抽象、自覺等の、高等な精神作用が行はれて來て、爪の代りに軍艦や大砲を發明したり、毛皮の代りに衣服家屋を工夫し、死亡を免かれるために醫藥を需めて、たゞ單に、同族間の競爭には止まらずして、自然界を征服すべく、自己勢力の扶殖に努力して來る、更に進で來ると智惠ばかりの競爭では竟畢利己と利己との衝突を買ふばかりで種全體の繁榮を計る道でないと云ふことを悟つて來る。此に於て團體的本能を發揮して、同情、友愛、殷譽等の道德心を先づ自己と利害を共にする社會から鼓吹し始めたのだろうと思はれる。男の精神慾は、元來生存競爭の必要に起原してをるに係らず、方法の久しき、遂に先天的傾向の如くになつて、最近の急激な文明の進步は、科學、文學、宗教、政治等の各方面に著しうなつて來た。この傾

向が｜男女兩性に作用して、近來の女性は、男の樣に自由を愛する、智識を愛する、權利を愛する、虛僞を惡む……者が次第に殖えて來た。と同時に、智識が女性をして自覺と云ふことを興させた。しかも動物の進化は、一に自然淘汰に待たなければならないから、其速度は至つて遲々たるものであるけれど、自然的才能を持つてをる人類は、人爲的の彫琢を加へて行くから、肆々として長足の進化を遂げて行くのである。

一般に女は噓と涙とを武器にしてをること、公共心に欠けてをること、猜忌、嫉妬が强いこと等を擧げて、其特質としてをる學者の說も、今迄の處では强ち否定することは出來ぬ。他に積極的の武器をも持たず、男の樣に大きな團體生活をも營まない女は、斯樣な消極的方法に出づるのも、淘汰の自然の徑路である。一度自覺が起つて來れば、男から輕蔑せられ卑まれゝば反省もする。

凡そ、政治に、經濟に、殖産に、敎育に、發明に、孜々として止まない社會百般の現象は、必竟人類の進化に對する努力に外ならない。人類の進化は如何にして遂げられたるか男女の改良に基かねばならない。男性のみ獨り優秀になつても、若も女性にして依然として劣等であつたならば、その遺傳を受けた子孫が、何うして存分な改良を見られよう。古來勇將の下に弱卒なしと云つてをる。偉人と唄はれた人は大低其母が偉い。人類が進化と

云ふことを意識してをる限り、慾求してをる限り、兩性の改良を計らなければ已まない。近來配偶者の選擇がやかましくなつて來て、男も女も、たゞ單に感覺的な外面的な條件をのみ標準とはしないで、高尙な內的條件に着眼し出したことや。結婚法の改良が唱へられて、昔の樣な盲目的なことは、人格尊重の今日には、排斥せられ出したことや、皆著しい現象である。

兩性の適者となるべく、努力し、學問し、修養するのではなし、人間として與へられたる能力を、遺憾なく發揮して、高尙なものになるのだと考へてをる人等も、或は此自然の本能に左右せられてをるのではなかろうか。生物存續の長い長い鎖につながれて生れて來た人間が、自分だけ一人、此因果を脫することが出來るであろうか。本能を超脫することが出來るであろうか。とは云へ、男にも自我があれば、女にも自我がある。自我と自我との互の適者となるには、中々精細な穿鑿が要る。それが、智識が進めば進む程、やかましくなる。從つて、好配偶を得ることが難儀になつて來る。一旦は得ても、或は間もなく破鏡の歎を見るに至るかも知れない。そうなれば自然、男にも、女にも、獨身者が殖えて來る、一方に生活難の聲が激しくなつて、益此傾向を助成する。斯る時代に。ウント獨身者が殖えて、しかも兩者互に居城を固めて容易に降らない。苟も意を充たすに足るまでは、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自ら高く止つてをればをる程、男女淘汰はよく行はれるのみならず、主として、同性間に行はれた生存競爭が、異性間にも行はれて來て、玆に女性は自然淘汰の恩澤に浴して、比較的劣等だつたものが、大に能力を展ばして來て、或は男性をして、城下の盟を止むなくせしむるに至るかも知れない。此に至つて初めて男女の調節が見られるであらう。「女性は先天的に劣等なものである」と云ふ觀念は誤りで、「或時代には何れかで劣等である」と云ふ方が、妥當ではなかろうか。

男も、女も、天才が凡庸を淘汰するのである。人類が、天才を愛すれば愛する程、進化の度が高くなることは明かであろう。世の大天才と云はるゝ人が、却つて子孫をのこさないで、劣等のものゝ子孫が、繁殖する現象が有る。一見矛盾の様ではあるが、然し其才能は、人類の幾多を進化し、向上心を刺戟して、進化の上に偉大なる勢を及ぼしてをると思はれる。

それと同じで今の場合社會の優秀な女性の中に多くの獨身者が現はれるとするとその人々直接の子孫は殘らなくなつても、それによつて他の一般の女性の上に力ある淘汰の原動力を與へるならば、それ等獨身者は女より間接に進化の上に貢献してをると云つてもよかろうと思はれる。

世界を見渡すに、王樣は國政を執られるか、皇后樣は何をせられてをるだろうか。奥向には、それ〳〵の役人が有つて事を捌いてをる。次第に、下になる程、女の役目は多くなつて、男が外で働くのに對して、女は男の手の及ばぬ所をしてをる。正しく、分業である。今これを、赤裡々にして、男と女との役目の大別をして見たならば、恐らく二つの根本作用に歸して了ふであろう。即ち、女は子を產ませられる。子を產むと云ふことは容易なことではない。十ヶ月間のあの見苦しい姿に伴ふ生理的の苦痛を怺へ、分娩と云ふ、殘酷な肉刑を忍で、苦勞を嘗め盡して、やつと一人前にすると、嫁なり聟なりに手渡しをする。これが女の役目の究極。男は、朝から晩まで、營々として働いて、妻と、子供とは糧を與へる。此外には何にもない。誰がこんなことを命令したのであろうか。又、何ぜ、こんなつまらない掟に服從して行くので有ろうか。人間は本能に騙されてをるのである。瞬間の快樂、男は此瞬間の享樂のために働かねばならぬ。然り瞬間の享樂。或は否定するであろう。誰れがそんな享樂のために、馬鹿々々しいと。しかも兩者の生理的表象が、已にこれを說明してをる通り、男性に經驗する樣な積極的の享樂、それさへも女性には見出すことが出來ない。若も、人間に情愛だの、精神慾だの、物質慾だのを與へてをかなかつたならば、誰れが働いたり、子供を產むだりするものがあらうか。男女の戀愛に執着が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あればこそ、永久的の同棲制度も出來てきた。親子の情愛が强ければこそ、身を忘れて子供のために犧牲にもなる。智識慾があればこそ、研究もし、發明もし、名譽心があればこそ、善にも進み、功名をも立てる。物質的慾望があればこそ、殖産興業も企てられ、相續人を養成して、財産の讓渡しをもする。同情心があればこそ、同族の勢力扶殖をも成し遂げられるのである。瞬間の享樂だけに、沒頭させる程に、人間は馬鹿ではない。其賢い人間にして、生殖の目的を果さしめむがために、動物には決して見ることの出來ない、種々の誘惑作用を十重二十重に構へて、質入れしてあるのにすぎない。戀愛と、性慾とを、別ものにするのは、徹底した考ではない。戀愛は、勿論異性間に行はれる誘惑物であるが、花にも蕋の變形して實を結ばない八重がある樣に、異性間のラブを時によつて同性間に見ることがある。これは、本能の變形ではあるまい。しかも、同性の戀愛に陷る者は、多くは熱情家に見るのは、本能の迸りが、同性にまで及ぶものの如き觀がある。男性には、かの靑樓に、一夜の春情を恣にする者の多いが如き、猛烈なる本能の刺戟を、他の慾望に導くことが出來ないで、徒に之を弄ぶものではあるまいか。

戀愛から出發して、瞬間の享樂、親子の情愛、が主幹となつて、其他の有ゆる、情緖、情操が分化せられ、智と、意とは、之を補佐し、育成する作用をなす。しかも人は、生れ

ながらにして、すべての心的現象を有してをるのは、全く遺傳によつて得た處ではあるまいか。あゝ爛熳たる春の花は、果實を結ぶを以て終局としてをる。生物は皆此外面的慾望にだまされて、本能の奴隷となつて了ふのである。子を產めば、母體はやがて枯死して行くではないか。或種の動物の如きは、交尾期がすぐれば雄は直に死で了ふ。

人生と云ふものは、此簡單な事實に左右せられてゐながら、此事實は、殆ど、無意識の樣な狀態になつて、方便の努力に、紛料、錯綜した現象を見てをるのである。最高善だ、最高目的だと云つた所で、種の增殖と云ふことを外にしたならば、其意味は、一向空漠なものになつて了ふ。

知らず識らず、本能に誘拐せられて、たゞ成り行きに從つて行くのも人生觀の一つ。何の目標もなく、何の意義をも考へないで、たゞ刹那刹那の快樂を追ふて、引き摺られて行くのだと考へるのも一つ。力戰奮闘して、進化を助くべきものだと考へるのも一つ。これ等は、とにかく生物界の原則に屈從して行く樂天派であるが、或者は、此種の增殖を計つた處で何になる、戀愛が何である、智識が何である、斯うしてゐた處で何うせ死なねばならぬ、たゞに、苦痛から苦痛に綱渡りの世の中に、働いてゐて何がおもしろいか。と人生を呪ひもしよう。本能に服從することを好まぬ者は、こゝに反抗的行爲を企てて、或は自

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

殺するであらう。或は、未だ情操の發達の鈍い野蠻人や、利己主義の狡猾な部類には、避姙、墮胎、嬰兒殺戮等の手段も行はれてをる。斯る行爲は、丁度酒を呑むで酒代を拂はないのと同樣、自然に對する罪惡である。しかしながら、それとて人間の勝手であるから、人類の廢滅を希ふものは、實行するであらう。自殺と云ふことほど、潔いことはない。公平なことはない。苦痛を厭ふならば、享樂をも辭するがいい。しかし厭世家の多人は、人生を呪ひながらも、やはり「生き度い」と云ふ執着を持つてをる。時には又、自然は、切めて獨身生活の無碍な快味を持つて、生きさせることに努めてをる。獨身生活は、確に、本能に對する反抗的行爲である。

要するに、人間は、色々の慾望にだまされて、種の存續、種の進化に對して、非常な努力を試みつゝあるのである。今や精神的快樂を味ふことの出來る男子は、世界に充ち滿ちてをる。從來の「外形的理想」は、次第に「內的理想」に進みつゝあることは明である。無學無能の女に滿足しないで、話せる女、理解の出來る女、思想を持つてをる女…………男の要求は昔とは大分異なつて來た。女の男に對する理想も、たゞ、單に、腕力の勝れた女を御する、權勢の有る、財產のある、と云ふだけではいけない。强壯は勿論大切であるが、精神的に深みのある、物の解つた、人格を尊重する、……と云つた樣に、互に選擇

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がむつかしくなつて、最早新しい思想を持つた女性であつたなら、獨身生活をするとも、決して屈服はしない。その代り、人格を尊重せられるに於ては、飽くまで努力して止まないだけの覺悟はあるだらうと思はれる。しかし、女が、自營自活するだけの能力を養はない間は、止むなく、心に侮つてをる様な敵軍にも降らなければならぬ。獨身生活に當然伴ふ生活問題、これが未だ未解決になつてをる。女は職業は未だ甚だ開けてはをらぬ。それは今まで其必要を認めなかつたからである。今後、若も、其必要を生じて來たならば、需用に伴ふ供給の道はつくに違いない。と云ふのは元來男と女とは生理上に差異がある。從つて精神上にも相違がある。故に、其智能發展の方向も、自ら異らなければならぬ。人間と云ふ以上、兩者は勿論共通に違いなかろうが、徒に、男の糟粕を甞めて得意がつてゐたり、男ソツクリの眞似をしたりして甘じてゐてはいけない。女には女の天地、女の特獨の社會がありそうなものである。男に得られない技能を發揮しなければ、全く女の不利益なるのみならず、人類の不利益である。

人類廢滅を期するならば努力も何にもない。萬事は休するのみだが、人生を問題にするならば、種の存續を豫想するは勿論であろう。存續を是認する以上、男女の結婚は當然の法則である。此法則を履行するならば、生殖主任は依然として女性の役廻りになつて來

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。女に生れたが因果、子も産むがいゝ、保姆にも、ハウスキーパーにもなるがいゝ、そしてその、適任者として唄はれたら、遺憾はないとせねばならぬ。此役は、決して、容易い、愉快なものではない。若も、女性が、此天地に完全なる貢献を捧ぐるならば、男に對して拂ふだけの尊敬は、亦、女に對つて拂はれるであらう。炊事道具の專賣特許が、男の手に握られてをる間は、女の頭は上らぬ。應用科學が、女の頭からも發達させて行く樣にならねば、女の勢力は及ばない。科學も、文學も、哲學も、宗教も、ドシ〳〵女の天地に輸入するがいゝ。兒童心理、女性心理、女性文學、女性哲學、女性宗教、今日までに一つだつて組織立てられたものがあるだらうか。固より、女の仕事は中々多い、女の浪費する時間は極めて莫大である。今少し、女の雜務が分業的になつて裁縫等は、之を專門の職人に出して了ふとか、炊事も、大體は引受けるものが出來て、小供も學校へ出て了ふ、と云ふ樣な工合に、女の時間に餘裕が出來たならば、女の思想界は開けて來るに相違ない。第一、今の家屋の狀態は、中々女に讀書の時間を與へない。書物に遠ざかれば遠ざかる程、益、其方の趣味に乏しくなり、新智識の蒐集に委る次第である。從來の風習によつて、男と女とは、丁度いゝ工合に分業になつてをる。仕事については、男と、女とによつて、强ち、女性を卑下するにも當らない。たゞ、今一歩女に「頭」が出來れば、自然に女の價値は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

認められて、女の仕事について、社會の尊敬を買ふに至るであろう。若しも、女性が、完全に其分業を奉仕しても、猶、男の專横を續けられるならば、其時こそ、女性の總辭職を斷行して、人類の足跡を斷つて了ふだけである。

女の仕事は、たゞ單に、家庭內には止まらない、餘力があつたならば、大に職業を需めて、自營自活の道を講ずるがいゝ。自立し得る信念がなければ、女の強い態度は得らない。

世の中に、夫の亂行、夫の虐待を忍でをる妻の澤山あるのは、自活するだけの實力がないからである。貞操問題等は、ほんの口實に過ぎない場合はいくらも有してをる。無數のノラは、容易に家を飛び出さない。そは自活の道を知らないのが大きい原因である。獨身生活を遂行し難いのも、生活に差し當り窮するからである。自營自活、最も、女の地盤を固めるものは、女の職業である。

一體に女に「男の厄介にはならぬ」と云ふだけの決心がほしい。絶えず自營の精神がなければ、ヤツパリ「男に養はれてをる」と云ふ、卑屈な考があるからいけない。「自ら人類の仕事の一部をして人類の進化を助けてをるのである」といふ信念がなければいけない。罷り違つた場合には、何時でも自立し得るだけの確信がなければいけない。今でこそ、女の職

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

業は乏しい。女の賃錢は廉い。けれど、若しも世界中の女が、此決心を持つて立つたならば、相當の仕事も出來、優に男を支配し得ることは、進化の經路に見て明かである。

女性にこんな自覺が起きて來たのは、確に人類進化の一現象である。反抗的態度、それがやがて兩性を淘汰する、段階になるのであらうと思はれる。

男と云ひ、女と云ひ「生殖」を中心に生きてをらねものはない。「進化」を中心に努力してをらぬものはなからう。そして、百般の事業は、これが方便となるのである。人生は、此淘汰と遺傳とによつて、轉々として、成るが儘の方向に行くものであると云ふことだけは見當がつく。しかし、現象其者について、未知數を推理するに止まつて、果して本體が何であるかは、依然として解することが出來ぬ、自分自身が毎日辿つてをる道が疑はしくもあり苦しくもあり、たゞ單に進化論の說く所に滿足することは到底出來ない、頭の一隅に伏在をしてる眞黑な或ものが常に私を惱ませ、私を絕叫せしめるのである。今はたゞ暫く世界の隅から隅までに二つの性が兩々相對して幾億萬劫一貫した方向に步みつゝあることだけが、僞りのない事實として認めてをくの外ない次第である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

習作の六 ―杉本正生―

汽車と船と俥と、涼しい湖の風はあるけれども八月の嚴しい太陽の光りは雲のない空に漲ぎり、白、青、空色、藍、に徒むるゝ波の上にも明々と照り輝く。然ういふ異なつた水や光りはお紺さんの眼には少し強く入りすぎて、何とはなく苦しくもの憾めしい。旅館に就くと、お紺さんは急いて浴衣に着更へた儘少し顏の色を不可くして眼を瞑つた。

『醉つたんだね。少し。』

と言つて蒼白い頸に散りかゝつた髮を撫で上げて遣る樣な事をする。

『でもあんまり長く、色んなものに乘つたのですもの。步きやよかつた。』

と言つて私つと眼を開くと莨の淡い烟を視つめた。女中が湯を知らせに這入つて來た。

『よくそんな事が言へるね。俥に乘つて苦しい人が步けば好いなんて。』

と濁つた樣な女中の顏を見遣り乍ら悵うお紺さんに向つて言つた。

花やかな男の高笑ひをきゝ乍らお紺さんは旅行袋から石鹼だのタオルだのを取り出した。

『勿論男湯は別だらふね。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『存じません。そんな事は。』

と言つて捲き縮かまつた浴衣の袖口から白い腕を露出して廊下の方へ出て了つた。何かは知らず快よい笑が上つて行つた。

晩夏の深い木立の陰は硝子窓を通して廊下の板の上に暗いばかりに落ちに來た。何處からとなく山の響きが通つて來る。夫れも幽かな韻きである。お紺さんは通りがけに帳場の方をちらと見た。金山講、靈玄講、さういふ旗印が深い廂の中に入つてある。何となく山詣でといふ樣な和樂(にぎやか)な日(ひ)を思はせる樣な宿だ。

湯殿は暗い房(へや)となつてゐて、高い天井からは弱々しい電燈が吊り下げられて照らしてゐる。鏡の前でお紺さんは浴衣を脫いだ。湯氣は何處からか拔けて行く樣になつてゐるのがまるで水蒸氣も立ち迷はず、瀏然りとしてゐる。驚いたのは湯槽の上は頑丈な岩で出來てゐて、冷された露はぽたりぽたりと湯面の中に落ちる。廊下から射し入る光りより他(ほか)には只一つの弱い電燈の灯光(ひかり)ばかりで、四方が閉されてゐると思ふだけなほの事心細くもの怖ろしい。何としてもお紺さんは湯槽の中に飛び込んで見る勇氣がなかつた。男湯は恰其隣りとなつてゐるかして、湯の音は折々通つて來る。夫ればかりか何か先方から聲をかけてゐる樣だけれども茫として能(よく)は分らない。

『恐ろしいのね。淋しいお湯ね。』

と語つて見た。勿論通じてゐないと見えて夫れにそはない様な聲がして來る。何時迄も愢してゐられないと思つて、深い湯底に片脚を入れて見た。

『何うだい。巳う洗つたかい。』

こいふ聲が此度は實に明晰にきこゑて來た。お紺さんは慌てゝ邊りを見廻すと、男湯に通ふ可き一枚の平戸が閉つてゐるのに氣が付いた。聲は其邊りから通つて來るのである。

『今這入つたばかし。寂しい處ね。心細くなつちやつた。』

と言つて幾らか元氣よく兩肩を撫で下ろした。男の聲は又高い笑になつて行つた。

『淋しいなら行つて上げ様か。玆へ來ても好いのよ。何處だつて同じだ。』

と夫れをきいても、此度は無言つてお紺さんは細い兩腕を差し伸した。仰ぐまいとしてか何うかするこ天井の岩の怖しい姿は眼に落ちる。然うしつゝ、お紺さんは今經て來た湖上の波、山陰の秋草の花、などを恍りとして瞳に描いた。長い旅途といへば東海道の一夜を明かした汽車もあつたし、姫路、馬關なども行つた事がある。夫れでも旅となれば幾ら馴れてゐても女の事には淋しい哀れは深い。思ひ設けぬ家に來て知らぬ人の聲をきゝ、すつこしてきた都會の人とならんとて歸つて行く。疲勞の肌に輕るく迫まる旅の湯は何となる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

くお紺さんを沈ませて行つた。

石鹸の雪白な泡は。ぶんぶんと匂つて滑らかな肌に辷つて行く。次第に脳は恁う重く倒れて來さうになる、好い加減にしてお紺さんは上つて行つた。

「晩い晩い。女の湯は長いなあ。何うしてゐるの。」

なぞと言つて覗きに來た。お紺さんは私つと振り返つて笑つた。冷めたい水で白粉を溶かせて頸の邊りを殊に白くした。頬に塗つたあまりの液で和かい乳の下まで流して行つた。銀の様に研ぎ澄ませた冷たい鏡の中に妖艶な丸髷の前髪が黑く光かる。

「私も髮を梳かう。些と櫛を拜借する。」

と言つて肩越しに手を差し伸されて、其湯煮た様に赤くなつた太い指に黄楊の細い櫛を渡してやつた。無遠慮に背後に突立つた男の右の衿先きが肩に觸るゝ。美しく並べた小髮の齒形の些かな亂れを活さうとて眼を瞠るのだけれども、男の浴衣の荒い縞目に遮ぎられて能くは見えない。

「暗いわね。其處に立つて頂くと。」

と言はれて態とらしく驚いて向方に逃げて行く。然ういふ男の背姿は快い或るものを與へてゐる様ではあり乍ら何となく心淋しい。お紺さんは巳う好い加減にして立つて了つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

房には已う灯が通つて來てゐる。

『好い湯だつたね。よく浸つたかい。』

と心を遣ひ乍ら胸を廣く開けて血の色の深い肌に風を入れてゐる。

『そんなにお熱いの。』

と圓扇に眼を移して食卓の上に倚りかゝつて莨を取り出した。其一つを男の脂ぎつた指に挾さみ、自身も新らしい匂を嗅いだ。

『今晩は宿つて行くんだらふ何せ。』

『え、え、妾しはさうよ。あなたは知らないけれども。』

とお紺さんは徒れてかゝつた。間もなく夕餉の賑かな料理が並ぶ、温かい酒の香が立ち迷ふ。

『やつぱり田舍の方が早く秋になつちまふ。ね、然うでせう。』

と言つて欄干に視線を遣りつゝ、無雜作に差し伸してゐる男の固い手の甲を指先きで叩いて見た。水色に弘がつてゐた湖上の波は、日沒の陽光にある處は白く輝き、而して深い蒼茫の色に陷つて行く。淺い處を漕いで行く船の艪の音がまぢ近く通つて來る。

『あゝ何うも是れぢや困る。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と言ふ聲で驚いて卓の上を見ると、灯に慕ひ倚る無數の羽根の白い蟲が、青い胴を仰向かせてぽたぽたと落ちて來る。

『困るねえ。何うか出來ないのかなあ。』

と言つて見仰ぐと、めまぐるしいばかりに天井の中心を取り捲いて立ち舞つてゐる。

『でも綺麗だわね。』

『淋しい蟲だなあ。』

と言ひつゝ卓の上に羽根を涼しく擴げた儘で轉がつてゐるのを火煮の先きで拾ひ乍ら、眼の近くに持つて來た。

『室を更へ樣かね。』

『いゝえ。妾しは構はないんです。』

『ぢや早くやつ付けて仕舞ふ。』

と急に忙がしく小皿のものを片付け始めた。

湖の色の次第に深くなつて行く姿がお紺さんには珍らしい。浴衣の帶を弛めて欄干まで出て見た。

『おい、石山まで行つて見ては何うか。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と已う箸を放した儘で莨を吹かせ乍ら元氣の好い聲を出す。

お絹さんは別に歩いて見たくもない、夫れよりは又と得られない哀れな二人の旅の心持ちを凝乎靜かに吸つて見たかつた。

『本當に疲勞れちやつた。』

と言つて軟かい身體を食卓を離れて長く伸して見た。

『でも下りて行つて見やうぢやないの。湖（うみ）がよく光る、あんなにさ。』

『ぢや一人で行つて御覽なすつたら何う？』

『さうしやうか。だつて淋しい。然ういふ約束ぢやなかつた。』

なぞと言つてはゐれど、矢張り欄干に凭れて熟乎湖を視てゐる。

『深く吸收するといふ事は不可能なんだな。』

ふと恁麼言葉が其處から來た。お絹さんはちらと其顏を振り仰いだ。

少時くして男は少し沈んだ眼を伏せ乍ら團扇を持つた儘で出掛けて行つた。取殘されたと思ふと何となき淋し味が逼つて來た。

莨の火を拂はうとて欄干まで行つた。屋根の下からは男の浴衣の半分が見える。莨の銀紙を取つて手で丸めるとぶいと投げ下ろして見た。夫れは外れて落ちて行つたけれど、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少し驚いて男は振り仰いだ。

『寂しいから歸つて入しやいな。』

『おいで、おいでつたら。』

下からは喰ひ違つた返辭のみを交してゐる。よく乾き限つた土は白く光かり、男の浴衣の縞も明かに輝いて見えた。不思議な寂寥に迫まられ乍ら、お紺さんは靜かに其背姿を見下ろしてゐた。

『深く吸收する事は不可能かも知れない。』

と今、男は夫れを何けなく語つてゐた。其れを語ふ人の心の底の危懼もお紺さんでは哀しい。

『あ、忘れてゐた。』

とお紺さんは立ち上つた。二日に續く旅途の身の廻りのものを二つばかしの用具包みから取り出して見た。石山に倚つたとは言へない爲めに途々で投り込んで來た色々のものをも其標しとならぬ樣に捨てゝ行かねばならなかつた。ふと汽車の中で貰つた食堂の燐寸が這入つてゐた。旅行袋の中には生家で貰つて來た土產物の種々が這入つてゐる。名產の白透絹の布片を包んだものが出て來た。末の妹に書かせたものと見えて水引きの嚴そかに結

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んである上に粗品と小さく拙くかいてある。何げなく裏を見ると小さく日付が記してある。生家を出てから思はず日の經て行つた事にも淡い怖れがあつた。而して其包み紙も脱つて了つた。

巳う歸つて來たのと見えて室の外の聲が陽氣に響いて來た。散かしたとの丶前た身を置き乍らお紺さんは輕い頭痛を感じてゐる樣に手を當て丶ゐた。

『つまらないから止した。』

と無雜作に言つて、太い足の膝小ぶしの見えるほど裾を捲き上げてゐる。

『おや、御掃除が始まつたね。』

『ねえ、巳う三日も經つちやつた。家を出て來てから。』

と凭れかゝるかの樣にお紺さんは男の體軀を見上げて行つた。

『三日が何うした早く歸り度いのだらふ。』

と言ふと何したのか寢轉んで向仰けに眼を瞑つて了つた。涙ぽい黑い眼で凝乎お紺さんは夫れを見てゐたが、何となき物怖ろしさが今更ら水の樣に全身を流れて行く。然ういふ事は爲つゝ案外男は靜平な腦でゐる事が能たかして速ぐでも女を返して遣り度い樣な氣がされて來るのだつた。而して不思議にも女の身ばかりではなく、女の良人も、自分の妻と、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自分と一様の沈頽した口い水を飲んで悶へてゐる様な氣がされて來る。

欄干の外光は悉かり退いて行つて了つた。頓て深い夜が來る。まるで氣紛れな涙がお紺さんの眼から流れて行つた。男はついと心を更へて立上ると

『暮れて行くと蒸汽が鳥のやうに見えるね。』

と言つて深い視線を湖上に送つてゐる。

『本當にさうね。』

とお紺さんも其側に倚り誘つて座ると雨になる様な雲が北良山の頂きから流れて來るのを見た。

――七、二六――

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戯曲 お夏のなげき(一幕)

——小林歌津——

人物

お夏。

清十郎。

遊女みな川。

乳母。

場所

姫路——但馬屋うちのお夏の居間。

時

ある晩夏の夕間暮——享保——

舞臺一面の薄暗——左の方に少さな高窓一つあり、よわよわしい午後五時の日ざし流れ入る、右は重さうな板の押戸半びらき、そのすき間より長いつや〳〵した廊下のぞかれる。中央は二枚折の屏風立てめぐらされ、その端から紅入の透谷の袂少しこぼれる、正面の屏風に清十郎さ、遊女みな川、二人よりかゝつて低い小聲でさゝやき合ふ、靜かに幕あがる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みな川――随分と長かつたわねえ?……(指を折りて)一ひ二ふ三ひ……どうやらもう四五年になるんですね……

清十郎――四五年……そんなになるかな……つい昨日の樣にしか私には思へない。四五年にもなるんかなあ……

みな川――花が散るともう螢が出て、やがて葉が枯れて、寒いお月夜がつゞいて……私は隨分と長いその間をこゝの石に腰かけてじつと待つてゐましたの……ごつごつと響きながら流れて行く三途の川は日に幾度も舟が出ますけど……私だけは渡らうともせずに、じつとあなたを待つてゐました。

清十郎――そうか待つてゐて呉れたのか……あの悲しい別れの日の思い出……お前の白い長襦袢の肩へ流れ出た赤い細い血の色……私はどうしても忘れられなかつた。

みな川――私も又、いつもいつもくりかへして見るのはあの時の事でした。……清さま……お先きにこの暗い路を一人歩んで來る時は、もうもう悲しい悲しい想が胸いつぱい……あなたの情ないお聲に後髮をひかれながら……

清十郎……(深く何か考へながら)私は……私はどうしてこんな悲しい別ればかりするのだらう……みな川にしてもお夏にしても……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みな川——それから但馬やのお店にあなたは御奉公なさいましたのね……

清十郎——うん、前掛の下に手を置いて、都の町の賑やら……島原の廓の燈の色を思ひ出し思ひ浮かべては泣いてゐた……

みな川——その涙は、ぢきに美しい美しいお娘御の友禪ぞめの振袖で、ぬぐつてもらふ様になりなさいましたらう？

清十郎——そうだつた……そしてとりつめた初戀の言の葉が私の耳に入つたのだつた。

みな川——私の生靈が、皆な世間の女の胸にしみこんで、但馬屋の店さきを通るものはきつとあなたを身にしみじみと思ひこんでしまふのです、中で一番、可愛らしいあでやかなお夏さんが、大勢の女達に勝つたのですわえ……。

清十郎——（沈んで）だけど、お前と同じ様に、悲しい別をしてしまつた。

みな川——そう……かけ落ものをのせた小舟がひきもどつて……私の影とあなたわ……別別の乘物にのせられて……私の影は四つ手駕の手にとりすがつて、聲を限りに泣きました。

清十郎——私はどうしても、女を連れて歩めなかつた！……そして、この世にも悲しいお別れをしてしまつたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みな川――清さま、さあ、川を渡りませう……川の向ふは、恐ろしい地獄なのです、私達は一度そこまで行つて、……そして、お情のある御佛の國に行きませう………

清十郎――舟が來たか……さあ行こうか、紫の雲のわく、蓮の花の散る、かなしみのない國へ………

（突然屏風の中より）

お夏の聲――影も……お夏も一共に……まつて………

（みな川清十郎面を見合せて急いで手をひき合つて押戸からすべり出る、押戸は音もなく閉まる。）

お　夏――（屏風の外に出て、）又夢か……夢なんだああ、生靈にしみこまれたあわれな女……清さまはほんさうに私は措いて、あの華魁さ、いつてしまふのかしら……。

（呆然さ、押戸の方をみつめてゐる沈默………果ては袂を目にあて、す、りなく。）

（乳母油さしを片手に戸口から靜かに入つて來る）

乳　母――お目ざめになりましたか………お夏さま、お目がさめれば又そうして、お泣きになる……さあ、面白いお話でも致しませうよ………

お　夏――……　………

乳　母――さあ、袂をさつて、お夏さま又そうして乳母（はあや）を困らせになるんですか、さゝも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うお泣きになるのはおやめ遊ばせ。

お夏――乳母(ばあや)が後生だからきかしてお呉れ……ね、手をあわせるからね。

乳母――（當惑げに）何をおきかせ申すのです？

お夏――清さまの御消息をさ……

乳母――お表の御居間で、御養生中……

お夏――（急に）うそ！うそ……又うそを云ふ……たんとおだましな、皆な何もかも知つてゐるんだのに……

乳母――何であなた様をおだまし申しませう、いづれ御病氣御全快の時にあらための御目出度事さ、旦那さまはおしやつてでございます。

お夏――經帷子かい？

乳母――何是……又そんないやみばつかり。

お夏――それならば何故、お兄様が、私のとこにお出になつてそうとおしやらないのだらう……こんなに一人の妹が、思つてゐるのに……たよりに思ふお前まで、そうそうそうそばかり、眞實の事たら、一つも敎へないで……早く清さまのところい行きたい！

乳母——早くおなほりになつてそして清さまにも乳母にもお兄様にも安心させて下さいませ。

お夏——なほるのじやないよ……あの世で御目にかゝると云ふ事さ……。

乳母——もうもうそんなお話はよして……そうそう新版紅繪をかつて置きました、さあ、さあ、これでも、御らん遊ばせ。

（押戸のかたわらより紅繪のたとうをもつて來る）

乳母——それ、お江戸日本橋……これまあお夏さま、何と、にぎやかではござりませんか、ささかなやお武家、御娘御、通ります通ります仲間衆の、いゝ形な、ほゝほゝ白い地藏が、あれまあ澤山に並んで……お富士さまも見えますなあ……今度は正月御大名の御參內……大したものでございます事……

お夏——（耳にもかけない樣に）……乳母お前おぼえてゐて……大神樂の景氣のいゝ撥音を？

乳母——何でございます？

お夏——ほら、去年のお花見の時の……もえ立つ草の上にひきつめた緋毛氈……小袖幕の間から私は、大神樂の方にかけて行く女達の後かげをじつと見送つたつけ……

乳母――群青地にくじやくの羽根を縫つた振袖で、島田姿のお美さ……あの時は、その頰も、ふつくらとしてゐて………

お夏――醉ひたをれたあの人の肩から白いお顏に櫻の花が、びらひらと散つたつけ……あゝ逢ひたい……たつた一目。

乳母――おさつし申ます……御病氣が御兩人ともよくなれば、もうぞうさのない事ですとも。

お夏――三晩も四晩も、一寸のうたゝねの間も、同じ夢を、私は見つゞけるのだもの……正夢なんだ……きつと（間）……、（不意）乳母や！あのね私………

乳母――何でございます、

お夏――あの夢占ひをして見ようと思ふの………

乳母――およしなさいませ、つまらない。

お夏――（簪をぬきて）この簪を投げるから……押戸の方の一疊にこれが落ちたら私の夢は正夢で、私達の方にあつた一疊に落ちたらば、さか夢なのさ………。

乳母――夢と申しますと？

お夏――清さまはなくなられたか、生きてゐるか………

乳母――馬鹿々々しいお夏さま……現に生きてゐる方を、縁起でもない………

お夏――もう皆なの云ふ事はあてにならないから……やつて見よう。

乳母――およしなさいませ……あれお夏さま縁起でもない。

お夏――いゝよいゝよ………

（二人爭ふ内に手ばやくお夏、簪を投げる、押戸のきわに、からんと落ちる）

お夏――落ちた……とうとう落ちた！

乳母――きゝわけのないお夏さま、あんなものが何であてになるもんですか………

お夏――（うるんだ聲で）やつぱり夢は正夢なんだ……私は、どうしたらいゝのだらう。

乳母――そんな事は忘れてしまつて乳母のお話をおきゝなさいましよ。

お夏――（一寸も耳に入らない樣に）あの簪のさころまで、この疊の筋を、なんじやくう……一本目吉……二本目凶……三本目吉……四本目凶……（小聲にいざりながらかぞへて行く）百二十三本目……凶だ！やつぱりだめなんだわ………

乳母――そんな事なされればなさるだけいけませんよ、それよりか、落付いて、早くおなほりにならなけりあ、いけません……おゝ暗くなつて來た、燈をけて、藥でも湧しませう………

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

(乳母、行燈に灯を入れて、そばの、薬土びんをさげて、高窓下の火鉢にかける、お夏、ぼんやりと空を見つめながら頬をつたわる涙をぬぐいもせずゐる。)

(夕間暮のさわがしい響にせかせかとした人の足音などきこえる、窓下を通り、子供等わいわいとわめきながら、行く、かすかに遠くから、さざれさざれに。)

子供の聲――清十郎殺すなら……お夏も殺せ……。

(乳母愕然と、立ちあがつて、窓を背にして、氣づかはしげに、お夏の方を見やる……)

(お夏、同じく愕然として、押戸の方に走る、乳母その後を追ふ。)

(寂しい行燈の灯一つ、ゆらゆらと、舞臺のゆれる……)

(窓の方より悲しい細いかすれ聲で)

お夏の聲――向ふ通るは清十郎ぢやないか、……笠がよくにたすげの笠……

子供等の笑聲……人々の話聲……

――幕落ちる――

(九月十六日夕)

お夢さまの小函 ――紅　吉――

お夢さまの小函は
美くしい千代紙のはりまぜ
色も柄もみんなちがうた
ませた子供のしなぶりのよう。

はいりきれない程
いつもいつ見てもふつくらさした
その小函は
お夢さまの只つた一つの
大切な小函
きれいなきれいな柔い小函

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

キユラソーの可愛い小瓶が
お染の膝にちやつと
のつかつて
歌麿の女が
お夏のふつくらとした二つの乳房に
ククリ、ククッと
入墨してゐるよう。

朱格子のはまつた
つつましい揚巻の室で
お夏の清十郎が
刺青とお三津さんをよむように。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほんに品よいお夢さまの小函は
まざりまざつた
千代紙づれのめくり合せ。

うつくしうもあり
せわしなうもある
ませた小供のそのしなの様に
青うに剃つた眉の下に
へつたりはられた錦繪草紙。

勝ちやんが日本髷結つた夜

圓窓より　―らいてう―

女としての樋口一葉

明治廿九年二月廿日一葉はその日記の中にかう書いた。

「……みたりける夢の中にはおもふ事、心のまゝにいひもしつ、おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば又もやうつせみのわれにかへりていふまじき事、かたりがたき次第などさまぐ〜ぞ有る。

しばし文机に頰づえつきておもへば誠にわれは女なりけるものを、何事のおもひありとてそはなすべきことかは。」

同四十四年九月、與謝野晶子氏は青鞜の創刊號に斯う書いた。

「山の動く日來る。

かく云へども人われを信ぜじ。

山は姑く眠りしのみ。

その昔に於て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山は皆火に燃えて動きしものを。
されど、そは信ぜずともよし。
人よ、あゝ、唯これを信ぜよ。
すべて眠りし女今ぞ目覺めて動くなる。」

又

「一人稱にてのみ物書かばや。
われは女ぞ。
一人稱にてのみ物書かばや。
われは、われは。」

明治が生んだ女流の天才といへば誰しもまづ一葉をあげ次に與謝野晶子をおすにさして異存はなからう。

時代がいかに變遷したからとはいへ、かう迄甚しく相違した色彩と調子と意義とを同じ女といふ文字が示すものかと自分は今更らしく驚かずにはゐられない。

けれど今二氏の比較論を書くのがこの稿の目的ではない。只今日晶子氏を得て新日本の我々が「我れは女ぞ」と誇らしげに高唱し得たのは矢張り一葉によつて代表された幾百年の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

壓迫の下になほも生きねばならなかつた過去の日本の女が「我は女なり」と嘆いた諦めの涙の後であることを忘れたくない。

實に一葉が二十五年の短生涯と廿餘篇の作品の總てを貫流する根本の思想感情は要するにこの日記の一節に外ならぬ。私は今一度改めて明瞭に記して置く。

「誠に我れは女なりけるものを、何事の思ひありとてそはなすべきことかは。」

海外思想の影響を多分に受けた最近の女はしばらくおく、今日迄大多數の女はそれが作家なると、讀者なるとを問はず殆ど總てが一葉崇拜者であつた。少くとも曾て一度は非常に好んだといふものであつた。私は或女友達からこんなことを聞いたこともある。

「一葉のものを讀んでゐると一葉といふ人が姉さんのやうに思はれてなつかしくてたまらない。」と。

もとより一葉のあの引締つた隙のない文章の力があづかる處も多からうけれど、弱者として何事にもぢつと堪へ忍ばねばならなかつた日本の女にかはつて、其悲しい胸奥の秘密、其苦痛を出來る丈の同情を以て巧にしかも力強く發表してくれたからではあるまいか。又男にとつても一葉の作品は今もなほアトラクティーブなものださうだ。女らしい女の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

作家が女に限られたる感情を眞實にそして色濃く描いたといふ點と、今一つには其描いた弱き女の悲しい運命が自からの强さを自覺することに快感を覺える男の同情を促し、あはせて女に對する男の理想――理想といふよりも利己的な、感情的な要求の一部を滿足させる點に於て惹きつけられるに不思議はない。

とは云へ斯樣に多數の、男らしい男から、女らしい女から同情理解されるといふことはやがて又其作品に表れたる人物はもとより、一葉其人にも個性的方面が欠けてゐるといふことを證明するものではあるまいか。だから一葉を論ずるといふ段になると、殊にそれが女同士の間柄では割合に興味の少ないものだ。

一葉全集上下二卷、ことに其日記には自分は少なからず種々な意味に於て失望した。又お引合に出すやうだが晶子氏が一葉の上に世の多數者のやうに多大の價値を認めてゐられないとかいふのを私は尤だとも思つた。

けれど一葉の人物を評するにも、其作品を評するにも現代の中に置いて見ることはあまり酷に過ぎるのであらう。どこまでも過去の日本の女として、そして過去の日本の女の性情を描いた過去の國民文學として觀るときそこに彼女の生涯と其作品とに動かすべからざる價値を見出されやう。

併し私はこゝでは作家としての一葉よりも、女としての一葉の生涯を主として觀察しやうと思ふ。

日記と作品を通じて案ずるに彼女を支配してゐる思想に大凡四つある。第一は儒教的思想で、第二は小乘思想、第三は浮世草子、元祿文學其他彼女が耽讀した多くの小說より得たる思想、第四は當時の日本の社會を風靡してゐた功利思想の四つである。

彼女は幼少の時から儒教的空氣の中に嚴格に教育された。親には孝でなければならぬ、親の命に背いてはならぬ。女はどこまでも物やさしく愼み深く何事にも堪へ忍ばねばならぬ。よし學問はなくとも道德がなければならぬ。男女は七歲にして席を同じうしてはならぬ、女の身として貞操は生命よりも重ずべきものであるといふやうな儒教的思想は柔かな彼女の頭に沒批判的に深く銘刻せられて、遂に牢として拔くべからざるものとなつてゐた。いかに內に多くの思ひがあつても實踐の上では儒教の示す消極的な道に從つて行動するのが常であつた。彼女が實生活の規範は全く儒教であつたと云つてもいゝ。

次に一葉は人も知るごとく中島歌子の門に久しく和歌を學んだ。そして國文の造詣は漢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

文のそれよりも深かつたらしい。中島氏も一葉を愛し、一葉を信ずること厚く、自分の後は一葉に繼がせる考へだつたし、一葉も亦師の後をうけて、歌道の爲めに身をさゝげたいといふ眞面目な決心も有つてゐた。歌道の荒頽を梗概してゐる歌は處々に散見される。是等によつて見るも一葉の頭に無雜作にはいつてゐるかの小乘思想の出所は國文學だといふことは言ふ迄もない。

第三の思想感情は貧困に際して彼女に小說を書かせた丈で、即作品によつて發表の道を得させた丈で實生活の上には全く現れずに仕舞つた。一葉をして作家とならせなかつたならばこの方面の思想感情が何等か他の形に於て實生活の上に現はれたに相違あるまい。

最後に當時の社會から受けた功利思想は一葉の心內に於てかの常識的な實際的な、儒敎思想と結合した。そして家に一錢の貯へもなく、明日（あす）炊く米にさへさしつかへる時でも一葉は國家といふことを念頭に置いてゐた。國家の爲めと云へば親の爲めと同じに彼女にとつては何かなしに權威あるものであつた。常に國を憂ひ、時世を慨し、時事問題や、時の大臣や、議會のことなどに注意を拂つてゐたのはそれである。もし一葉が男だつたら國家に身命を献げる志士となつたかも知れない。

けれど私は次のやうにきいて見たい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「一葉は曾て一度でも國家とは果してどんなものかと自から疑ひ、自から考へたことがあつたらうか。國家と個人との關係に思ひを潜めたことがあつたらうか。同樣に親子の關係について眞に考へたことがあつたらうか。」と

さて私は以上異なる四思想が一葉の人格内でどんな關係を有つてゐたかを調べて見ねばならぬ。

悲しいかな彼等の知的修養は彼女をして是等の思想を統一してそこに渾然たる一葉自身の思想を作出させなかつた。言ひかへれば彼女はそれ丈の敎育を受けた女ではなかつた。のみならず外的の壓迫や、生計の困難は彼女に思索の餘裕を與へなかつた。彼女が吸收したあらゆる經驗はそれが書物からと實生活からとを問はず皆それながら、個々別々に孤立の姿を以て雜然としてはいつてゐた。彼女は是等個々の直接經驗以上のものを其人格の中より創造する丈の深き内的生活を有つてゐなかつた。

女の知的興味は具體的智識にあるとすれば、これも一葉の女らしい所以であらう。あはせて作家たるの所以でもあらう。

觀よ、あの日記の大部分がいかに忠實な具體的智識の記述に滿ちてゐるかを。

一葉には一葉自身の思想がない。問題がない。創造がない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれど斯の如きことを一葉に求めるのがそも〳〵のあやまりかも知れない。

若い女の日記として、又かくまで文壇にもてはやされた才媛の日記としてあまりに淋しい一葉の日記の前半に悲しい、淋しいとはいへ若々しい色彩を投げたものは半井氏に對する一葉のつゝましい戀である。

この戀の顛末を語ることは一葉の性格の發展を窺ふ上に、彼女の若き女としての情的生活と其と思想の衝突、社會及境遇の壓迫等を知る上に、その戀愛觀や、理想等を明にする上に決して無益なことではない。

一葉が始めて半井氏に面會したのは二十四年の四月十五日であつた。それは彼女が母親と愛妹の爲めに生活の資料を得べく小說を書かうと決心した時だつた。友人の野々宮某を介して氏に賴みよつたのであつた。十八歲で父を失ひ傾く家運にこの世のつらさ、人情のたのみがたなさに泣いて來た不運な彼女にとつては初對面の半井氏の同情や、懇切な言葉は淚が出るほどうれしかつた。其上氏の風貌は彼女が其日の日記に「色いと良く面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべくこそ覺ゆれ、丈は世の人にすぐれて高く、肉豐かにこえ給へばまことに見上る樣になん。」と記した程だつた。逢ふこと二度びに

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して「人一度みてよき人も二度めはさらぬもあり、うしは先の月末見え參らせたるより、今日は又親しさまさつて世に有難き人哉とぞ思ひ寄りぬ」といふやうにます〳〵進んで行つた。この頼りない心細い若い女の心に宿つた兄とも、師とも思ふ親しさ、なつかしさの情がやがて戀しさに變るに何の不思議はない。八回目の訪問の時はもう明にやさしい戀の悶えがあつた。その日の日記に、

「秋の夕暮ならねど思ふことある身にはみる物、聞くものはらわたを斷ぬはなくともすれば身をさへあらねさまにもなさまほしけれど、親はらからなどの上を思ひぬれば我が身一つにてはあらざりけりと思ひかへしつべし。あゆむともなしにいつか坂上には成りぬ。こゝよりはいとにぎはしく馬車など音絶えずはせ行けばあしもとなどもあぶなげなり。猶おもいつづけてうつむき勝にくる樣のいかにあやしかりけん、道行く人のおもてさしのぞく樣にするもいとつゝましく、人わろければさしもみえじと思へど猶おのづから色にもるる成べし。

男に對するごき左程でもないことも戀を戀する憧れ心から何事も戀めかしく思ひ又感じたがるのはすべての若い女の常ではあらう。けれど、一葉の戀はどこまでも愼み深い女だつただけ、眞面目なものだつた。うぶな心のやましさ、恥かしさから訪問することも控へ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

目勝にしてゐたことや、頭痛に苦しんだり夢におそはれておびえなどしたとあるのは此邊の消息を語るのではないか。

半井氏がどてらなどの打とけ姿をしてゐる時は「さしむかはなんおのづから汗あゆる心地す。」と云ひ、「例の人なき小室の内に長火鉢一つ間に置いてものがたりすることよ、我が學びの友達あるは親戚の人々などに聞かせ奉らんには何とかはそしられん。あやしかるべき身にも有かな。ましてかたみに語り合ふことなどいとまばゆしかし。」と何かにつけて處女らしくおど／＼と氣兼ねばかりしてゐる。

時として半井氏からそれとなく心あるらしい事など聞かされても（思ふに最早三十あまりの半井氏は一葉がかうまでうぶな戀を內に隱してゐやうとは知らないで、偶には輕い冗談も云つたのだらう。それを一葉はどこまでも眞面目にとつてゐたのかも知れない。）外目には知らず顏に聞き流してゐた。否、朝夕彼を思ふ其同じ心に「あなうたてのことや」と叫ぶのであつた。

かの「雪の日」は單に作としては左程のものとも思はないが、その腹稿の成り立つた時と場合とを考へると流石に興味を覺える。

それは廿五年二月四日の雪ふる日のことであつた。半井氏を訪問し、色々の話をして四

時頃歸らうとしたが、雪はいよ〳〵降り積るばかり、氏は頻りに一泊をすゝめた。けれど一葉は母の誡めがあるからといつて車を貰つて强て歸宅した。その路すがらさま〴〵の感情が胸に迫つて、出來たのが「雪の日」の腹稿である。この日のことは彼女の雪ふる毎の思出であつたらしくずつと後の日記にも、

「ひる頃より雪降り出づ、萬感こゝに生じて散亂の心ことに沈めがたし、我が雪の日をめづるはめづるにあらでかなしむなりけり。かの火桶をはさみてものがたりのどかに、手づから調理し賜はりししるこの昔、戀も悟もかの雪の日なればぞかし」とある。

謂ふところの戀と悟とは果して何ものだらう。かの「雪の日」の内容を見よ。恩愛深き只一人の伯母を捨て、世に背き、故郷を離れて、戀を遂げたお珠が雪ふる年毎の悔はどれ程だつたらう。伯母が隣村へ行つて不在の日、雪ふるまゝに只々師の君なつかしの念に迫られて、前後無差別に家を逃れ、遂に誡の罪を犯し、伯母を悲歎に殺したお珠が後の生涯はどれ程不幸だつたらう。

いさゝか穿鑿に過ぎるけれど、一葉は其根本が儒敎でかたまつてゐた人だつたからお珠のかういふ運命を特に描いて一つには現在の己れを戒めたのかも知れないが、これが若い女が戀の最中にあつて書かうとした作かと思ふと矢張り哀れに淋しい。

更に日記について彼女の戀愛觀を一層明かにしやう。

「見ても聞きてもふと思ひ初めぬるはじめいと淺し。

いはでおもふいと淺し。

これよりもおもひかれよりも思はれぬるいと淺し。

これを大方の世には戀の成就とや云ふらん。

逢そめて疑ふいと淺し。

わすられて恨むいと淺し。

逢はむことを願はねど相おもはむ事を願ふいと淺し。

相思はむも願はず言出んも願はず、一人こゝろにこめて一人たのしむいと淺し、名取川瀬々のうもれ木あらはればと人の爲我がためををしむらんたぐひ、うきに過ぎたる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心ばかしここに通ふものから身は引はなされてことさまに成行、さてはみさほを守りて百年のいたづらぶしのたぐひ、いづれか哀れならざるべき、されどもこれらは戀に醉ひ、戀に狂ひ、此戀の夢さめざらん中々此夢の中に死なんとぞ願ふめる、おもへばいと淺き事也。されども浦山しきは此さかひ成るべし。

まこと入立ぬる戀の奥に何物かあるべき、もしありといはゞみぐるしく、にくく、うく、

つらく、淺ましく、かなしく、さびしく、恨めしく、取つめていはんには厭はしきものよりほかあらんとも覺えず、あはれ其厭ふ戀こそ戀の奧成けれ。

彼女は到底戀に醉ひ戀に狂ひ、夢の中に死ねる女ではなかつた。醉はむにはあまりに彼女の心は緊張し過ぎてゐる。彼女の眼は其若さに似げなくあまりに冴え過ぎてゐる。周圍のみならず、遠方まで見え過ぎてゐる。彼女の片意地な、勝氣な、孤獨な、どちらかといへば暗い、悲しい性格と神經質に過ぎるほどの廉潔は總て華やかな戀には不適當である。彼女にとつては戀そのものが、悔悟と、悲歎と苦痛、寂寞、醜惡、憎厭の國に入るの門戸なのだ。

次に注意すべきは彼女が所謂「悟」なるもの、即斯くの如き戀愛觀と同時にもつてゐた一種の理想に就てゞある。

「人をも忘れ、我れをも忘れ、うさも戀しさもわすれぬる後に猶何物ともしれず殘りたるこそ此世のほかの此世ならめ、かゝるすゑにすべてたのしなどいふ詞を思ひ出づべきにもあらず、さればくるしといふ詞もなかるべき筈と人云はんなれど、その戀あればこそ世にたゞよふなれ、捨たりといへど五體うごめき居らむほどは此苦も又はなれざるべし。佛者の佛となへ、美術家の美となふる、捨てゝ捨てゝすてぬるのちの一物やこ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れ。」

又、

「あやし我こゝろは二つあるか、かたへより見れば淺ましくもをかしくかへりてはおろかにいやしくさへおほゆるを、今一方にてはよし此身あればこそかゝる物思ひもするなれ、淵にも入らなん、海にも沈まなん、すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きもおもはじなどさへ思はるゝよ。あはれ迷ひはいつの日にか晴れん、まことの美をばいつの日にか見む。」

次に(戀愛と結婚とを一緒にして論ずるのはいさゝか不當のやうだけれど。)一葉は父在世の時自分の聟となる筈だつた男の一旦或事故の爲め破談になつてゐなのを、今度新に先方から申込んで來た時、

「この人に我れ依らんか、母君をはじめ妹も兄も亡き親の名までも辱かしめず、家も美事に成立つべきながらそは一時の榮もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん、母君に寧處を得せしめ、妹に良配を與へ、我れは養ふ人なければ路傍にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん、今にして此人に靡きしたがはん事なさじとぞ思ふ。そはこの人の憎きならず、はた我れ我慢の意地にも非ず、世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捨てゝ

小町の末我やりて見たく云々」

今日の我々から見れば是等の言葉は隨分大まかで、そして反省を欠いてゐるやうだが、兎も角、朧氣ながらも、一葉には小乘思想より得來れる幼稚淺弱な、一種の靜的理想境に對する憧憬があつたことは十分に認めることが出來る。

一葉の胸に成長しやうとした戀の芽を踏みにぢつたものは、貞操を重んじ、純潔を尊ぶ儒敎思想と、人間の情的生活を蔑視する小乘思想と彼女の過度な神經質とである。

一葉は理想に生きる女である。プライドの爲めには身命を惜しまぬ女である。

彼女は「わかれ道」のお京の心持はよく想像することが出來た、けれどお京となることはまだ〳〵容易でない。

かう觀察して來ると、彼女が半井氏との戀の成就を計らなかつたのは、又生涯獨身生活を送つたのは寧ろ當然の結果で、あながちに境遇と社會の壓迫にのみ事もなげに歸し去らうとするのは早計のやうだ。

胸にあまる思を包んで絕えてその人に語らなかつた彼女は自から戀と自覺するほど、かうまで彼の君を慕ふのも師の君とも兄上とも思へばだと强ても己れを僞つて、せめても自からを慰め安んじやうと努めた。半井氏をどこまでも只師とし、兄としやうと願つた（そ

れも一葉の弱點からではあらうけれど）彼女は彼を戀人と思ふことは彼女自からの心が肯じなかつたところ、まして夫と思ふことは斷じて潔しとせざる處であつた。かりそめに思ふさへ堪へがたいことだつたらう。

既に以上のやうな思想を抱いてゐる一葉である。世間から半井氏との關係に就て浮名を立てられ、友人達はともあれ、日頃信賴してゐた先生（中島歌子氏）から又世に上なきものと大切にしてゐた一人の親から迄疑の眼を以て目せられ遂に交際をさへ絶たれた時の一葉の苦痛、煩悶は察するに難くない。

「雪の日」の中に

「よし戀にても然かぞかし、無き名なりせばこそお師匠樣と追從もしたれ、益も無き他人を珍重にはあらず、年來美事に育て上げて、人にも褒められ、我にも誇りしものを、口惜しき濡れ衣きせられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以來は斷然と行ひを愼め、其方が名をも雪ぎ我心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思はゞ桂木とも思すな、一郎とも思すな、彼の門よぎるとも寄り給ふな。と疊みかけて仰する時、我が腸は斷ゆるばかりなり。」

とこころがやがて其噂ももとは半井氏其人の口から出たものだと聞かされた。（半井氏とし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ては又男としては一葉を妻だとか、關係ある女だとかいふ位なことは隨分言ひかねまい。又云つたとしても別段惡意があつたではなからうけれど）これは一葉にとつては多大の打擊だつたに相違ない。「彼の人眼の前に死すとも涙も流すまい」と決心させる位だつた。それ程彼女は彼を愛した。

かう迄盲目的に反撥的な感情に支配されて人を憎み、人を恨む其表面の心は淺ましいけれど、更にその心の奥底に分け入つて彼女の愛のいかに强かつたか、其理想とし、プライドとするところの那邊に存したかを同情の眼を以て觀察すれば咎める氣にもなれない。

彼女の心はあまりに純なのだ。あまりに美し過ぎるのである。眞面目過ぎるのである。半井氏よりも一葉の方が餘程お人好しだつた。

しかも一葉の思は彼につれなく振舞ふほど、ふたりの間の遠々しくなるほど增つて行つたではないか。

廿六年の七月末、貧に窮して小商賣を始める爲め下谷龍泉寺町に引移つた日の感想などはそゞろに涙ぐまれる。

「前略、何事もなればかく心ぼそくのみあるべきならず、知る人も出來あきなひに得意もふゆべし、そは憂しとても賴なき事也、唯かく落はふれ行ての末にうかぶ瀬なくして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

朽も終らばつひのよに斯の君に面を合はす時もなく忘られて、忘られはてゝ我が戀は行雲のうはの空に消ゆべし。昨日まですみける家はかの人のあしをとゞめたる事もあり、まれにはまれ〳〵には何事ぞの序に家居のさまなりとも思ひ出でゝ我れといふものありけりとだにしのばれなば生けるよの甲斐ならましを、行ゑもしれずかげを消してかくあやしき塵の中にまじはりぬる後よし何事のよすがありておもひ出られぬとも夫は哀ればんなどの情にはあらで、終に此よを清く送り難くににごりににごりぬる淺ましの身とおもひ落され、更にかへりみらるべきにあらずかくおもひおもへばむねつとふさがりていとねぶりがたく云々」

私は一時かつと一葉の心の總てを占領したあの烈しい反抗心が、彼女を驅つて自から「にごりえ」に投ぜしめなかつたことをよろこびたい。もし一葉に何等の敎育も與へなかつたならば、又小說其他によつて、自己の感情を吐露する道を有たせなかつたならば、或は「お力」の道を歩んでゐたかも知れない。

それより二年ばかり後、彼女は半井氏に就いてこんなことを日記に書いた。

「前略、その昔のうつくしさいづこに影かくしたる、雪のやうなりし色はたゞくろみにくろみて、高かりし鼻のみいちじるしく成りぬ。肩巾の廣かりしも膝の肉の厚かりしも、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やう〳〵にせばまりて打みる處は四十男といふとも僞ならず見ゆ。なつかしげに物いひ打笑ふさま、さはいへど大方の若ざかりよりは見にくからずたゞ誠の兄君、伯父君などのやうにおぼゆ。君はいくつにかならせ給ふ、廿四とや、五年の前に逢そめ參らせたるその折に露違はずもおはしますかなといひてこゝろおく方もなく語る。此人故に人世のくるしみを盡して、いくその涙をのみつる身とも思いしらねばたゞ大方の友とや思ふらん、今の我身に諸欲脫し盡して假にも此人と共に人なみのおもしろき世を經んなどかけても思はず、はた過にしかたのくやしさを呼びおこして此人眼の前に死すとも涙もそゝがじの決心など大方うせたればたゞなつかしくむつまじき友として過さんこそ願はしけれ、かく思ひ來りて此人を見れば、菩薩と惡魔をうらおもてにして、こゝに誠のみほとけを拜めるやうの心地いひしらずうれし。」

要するに戀の一葉は徹頭徹尾「いと小さき理想家」に終始した。幼稚な理想家とし、無活動な自由のない小乘の悟りの中に跼蹐し遂に百尺竿頭一步を出づるの道を知らずして終つた。けれど否定の後に來る大なる肯定の世界を欲求する自分は一葉のかういふ消極的な否定の生活にも亦多大の意義と價値とを認めたい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女は或日友人の野々宮某と教會へ行く約束をしたのを半井氏の忠告で中止したことがある。其他日記中に野々宮外一二の友人と宗教上のことを論じ、談佳境に入りて中々盡きずといふやうな記事が二三ヶ所に見えてゐた。是等を以て彼女に宗教的要求のあつたことも、宗教上の問題に興味を有つてゐたことも察せられるが、其内容に關しては、いつも何も語つてない處から考へると彼女は今私が記載した理想境以上の内容ある何ものも有つてゐなかつたらしい。

しかも彼女の性格にはたとへ其心の奥底に無意識的にせよ人一倍に強い宗教的要求が絶えずあつたにしても容易に宗教に全我を投ぜしめないものがある。

かの「書簡文範」を讀んだものは自からに肯かれやう。いかに彼女の世界は常識的、世間的方面に發展してゐたか。

「苟しくも敵をつくるな」とは彼女が處世上のモットーだつたと私は信ずる。

あの萬遍なき世辭、愛嬌は當時の風習もあらうけれど殆ど不快の感に打たれる程だ。しかも彼女自身は人事間の是等形式的の虚僞、虚飾を左程の苦痛としてゐない。否寧ろ人として殊に、弱者なる女として當然なすべきことゝ疑ひもなくあきらめて心に咎めないのみならず却て自から此方面にも出來る丈の才を見せやうと努めた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

矢張り一葉は「都會の女」だ。しかも「舊い日本」の都會の女だ。

彼女の神經質から來る潔癖や、狹量や、女性的な嫉妬、猜疑は常に自分の師である中島歌子氏や友人である其門下生等に對しても決して好い感情を彼女に有たせなかつた。師を罵り、友を疑ひ、世は皆濁れりとし片時たりとも心を許さなかつた。否敵意をさへ包んでゐた。

彼女が處世上のモットーはいよいよ「苟しくも敵をつくるな」でなければならぬ。然り彼女は教師に對してはもとよりあらゆる人に對してよくも如才なく振舞つた。

人と人との關係的生活に於て斯くの如き一葉の性格の一面はそれが發達してゐる丈、複雜な丈それ丈他面に於て宗教的要求はありながら、しかも容易に宗教には走らせない。

一葉は終に神を知らなかつた。佛を見なかつた。

よし彼女になほ多くの齡を與へても所謂宗教的の安心立命は得られなかつたらう。かの「やみ夜」の翁の最後はやがて一葉が臨終の心ではなからうか。

「あはれの孫と頑固の翁と只二人、傾きたる命運を藥屋が軒の月にながめて、人きかば魂や消ぬべき無殘の詞を遺して我れは流石に終焉みだれず、合掌すべき佛もなしとや、嘲る如き笑みを唇に止めて、行方は何處ぞ地獄天堂、三寸息たえて万事休みぬ。」

彼女にはわるくすると「お力」、「お京」の道に赴かうとする傾向の方が寧ろ勝つてゐる。

一葉の社會觀、人生觀は「やみ夜」「わかれ道」などで殊に明かに窺はれる。

「不運は天にありて、身から出た罪にもあらぬを親なし子と蔑しめる奴原が心は鬼か、蛇か、よし我等が頭に宿り給ふ神もなき佛もなき世なるべし。世間は我等が仇敵にして、我等は遂に世間と戰ふべき身なり。祖父なき後は何處に行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさず、人我れにつらからば我れも人につらくなして、さても憎まるゝほどならば生中人に媚びて心にもなき追從に破れ草鞋に踏みつけらるゝ所業はすなさて口惜し涙に明けくれの無念はれ間なく、我が孫かはゆきほど世の人憎ければ此子が頭に拳一つ當てたる奴は縱令村長どのが息子にせよ理非は兎も角相手は我れと力味たつ、無法の振舞やうやく募れば、もとより水呑百姓の瘠田一枚もつ身ならぬに憎き老ぼれが根生骨美事通して見よやとばかり田地持ちに睨まれたるぞ最期、祖父孫二人が命は風にまたゝく殘燈の言はんも愚や消ゆるは定なり」（やみ夜）

社會と個人との關係、强者と弱者との關係に對する一葉が胸にあまる悲憤の叫びではなからうか、同時に個人と弱者に對する熱烈の同情、社會と强者に對する絕望的の反抗の聲ではなからうか。

早く父に別れ、傾く家運をかよわき女の身一つに支へ、つれなき浮世の波風と戰ひながら、老母と妹とを愛養した一葉の境界は正しく斯くの如きものであつたらう。

薄情な世間に對する反抗心は一葉をしてますます母と妹とをいとしきものとさせ、一意に大切にさせた。

又この反抗心は常に表面如才なき愛嬌を見せしめながらも何處かプラウトに構へて絶えて人に媚びることをさせなかつた。

自分に少しでもやさしいことを云ひよるものを直に「しれもの」呼ばりしたり、ともすれば人を疑ひ、「……正しく我に仇せんとなるべし、よし仇せむとならばあくまでもせよ、樋口の家に二人殘りける娘のあはれ骨なしか、はらはたなしか、道の前には羊にも成るべし。仇とききてうしろを見すべき我にもあらず、虚無のうき世に好死處あれば事たれり、何ぞや釧之助風情にかしらを下ぐるべきかは、上に母君おはせばこそ何事もやすらかにと願ひもすれ。」と力味かへつたりするのも其由つて來る處を考れば涙も出やうではないか。

次に一葉の文名がとみに高つて、爲めに文壇湧くが如き狀態になつた時の彼女の態度はどうだつたらう。虚名のはかなきをなげき、今日褒めるのは明日罵らう爲だ、あゝ迄ほめそやすのは自分を只女と斗見るよりのすさびだから其評もとり所なく、疵あつても見えないのはあさましいと云ひ、はては友の嫉み、師の怒り、にくしみ、恨みなどを買ひはせぬかと心配までしてゐる。

かうした自分の名聲を無邪氣に喜ぶことの出來ないコセ〳〵した淋しい心（これには例の東洋道徳の立場から自分の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の東洋道德の立場から自分の慢心に對する警戒の態度も多少あるやうに思はれるけれど）これも唯「いかにも女らしい」とか「ひがんでゐる」とかいふやうな大まかな言葉の下に冷かに許し去るのは一葉の心事に對する同情理解を欠いてゐるからだ。

一葉の作品の總てが弱者と又弱者の數に洩れぬ女に對する熱烈な同情なのはあやしむに足らぬ。

けれど一葉の心はまだ左程に淋しいものぢやない。眞に淋しいものぢやない。所謂近代的の女の心の淋しさとは違ふ。

まだ年が若かつたからでもあらうけれど彼女には十分な反省がなかつた。意識的な處が少なかつた。自己に對して批評的な處が少なかつた。

だから社會を呪ふけれども決して自分は呪はない。世の濁れるを憤るけれど、いつも自己は清い正しいとして自から安んじもし慰めもしてゐる。人に對しては狹量でも己れに對しては案外寛大である。

彼女は孤獨ではあつたらうけれど、其心は左程淋しくはない。まして暗くはない。

一葉になほ多くの年齡を與へて現代に生存せしめたらばどうだつたらう。彼女は變つた

らうか。
私の見る處では一葉はさう大して變れない人間のやうだ。急激な心的革命の得られる人ではない。屹度婦人の自覺問題や、新しい女などには寧ろ沒交渉で生きてゐるに相違ない。何ぜなら彼女は已にあまりに修養が出來てゐた。否、生れながらにして或程度迄修養の出來てゐる人間だつた。小さいながらも已にちやんと型にはまつた「完成された人」だつたから。

彼女に歌道の爲めに盡さうといふ眞面目な覺悟があつたことは既に言つた。けれど小説を書くことに關しては彼女は生活の資料を得る以外何の意味も認めてなかつた。又作家としての生活がどれ丈價値あるものかといふやうなことも曾て考へても見なかつた。

只々親兄弟を養はむが爲であつた。親兄弟の爲めに餘儀なく筆を執つた一葉はなほも生活難に堪へないで親兄弟の爲めに小商賣を始めた。それは吉原近きある乞食町だつた。この間の生活は彼女が人生、社會に對する眼界を廣め、經驗を增さしめあはせて作家としての觀方、態度を新にし、作品の上に一大進境を示させた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼女が一代の傑作「にごり江」「たけくらべ」「わかれ道」は即ちこの間の生活の産物である。

かくて一葉の名聲、作家としての價値は動かぬものとなつた。けれど一葉にとつてはこれは全く偶然の結果に過ぎない。

一たび自分の名聲が世に高まつて仕舞つたので、流石に負け嫌いの乘り出した舟ひく譯にも行かず、さてはこゝに決心の臍を固めたやうな次第なのだ。

實に彼女の天才を發揮させたものは、そして彼女の生命を明治文學史上に不朽にしたものは直接、生活の壓迫だつた。只々親兄弟大事と思ふ一念だつた。その深いいつくしみの情だつた。よく己れを捨てるものはまたよく己れを得るのだ。

けれど啻に作家としてのみ認められることは、それがいかに紫清以後の女流文學の天才として萬人の許す處であらうとも一葉の本懐ではあるまい。否、寧ろ彼女自身の與り知らざる處であらう。

彼女の生涯は女の理想(彼女自身の認めた)の爲め、親兄弟の爲めに自己を殺したもの。其の價値は消極的の努力奮鬪そのものである。

彼女の生涯は否定の價値である。

矢張り彼女は「過去の日本の女」であつた。

「誠に我れは女なりけるものを、何事の思ひありとてそはなすべきことかは。」

——（完）——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歸へつてから ―紅 吉―

秋が來てゐました。

私は又東京に戻されました。私はこんなに短い日數の間にこうも善くなつて東京に歸へつて來られ樣とは全く豫想にも及ばなかつたのです。勿論私の友人なり周圍の人達は私以上不思議に思つてゐます。驚いてゐます、半ば不安らしくも考へてゐるのです。けれど私は秋の來てゐる東京に、早く早く歸へされて來たのです。

私が病氣になつた前後、見舞に來てくれた友人の全部は申合せた樣に、あなたの爲めにあなたの病氣になつたと云ふ事を私は心から悅むでゐる。又あなた自身でも恐らく全快の曉否その途中できつと自分の病氣になつた事を悅ぶに違いないと話してゐました。

無智で我儘でそして幼稚であつた私は、その時それらの言葉がどれ丈眞實なものであらうかを全く知らなかつた又知ろうともしなかつた。

私は只友人の慰めの言葉として嬉しく聞いてゐただけでした。

入院してから丁度二ヶ月目、九月の拾四日に私は勉强してもいゝ、然し少なくも一年間は過度の分子から離れて充分靜養をしなければと云ふ條件の下に退院を許可された。

その時私は自分にむかつて眞面目によろこむだのです。

私の友人の言葉は、全く眞實だつたのです。私は病氣になつた事を全く悅むでゐますもの。正直に考へてゐる、それだけに深く悅むでゐるのです。短いながら、その短い日の間で私は或る自分の弱點を見出した、自分自身の眞面目さを見出し兼て泣いた。私として一番心苦しい事件にも出會した。生れながらの責任を考へさせられてゐた。自分自身の幼稚で正直で無邪氣であつたことが實社會に立つて、まるきり性格、氣分の變つたものとして紹介されてゐることも氣付いた。私は一々かき立てる事の出來ない程、私として術の勝ち過ぎてゐた程思はせられてゐた。けれども總てを集めて一つの形を作り上げるなれば私は、その物に「眞面目たれ」と名をつけるに恥ないのです。

私は病氣になつてから牛乳も好きになつた、又魚も肉も野菜の或る物も滿足に食べられる樣になつてゐた。けれどもそれらは、只私の肉體の充實を許つてくれたのです。私は、その事についても悅むでゐます、自分の身體にいい元氣のある血液のたんだん增してくることも悅むでゐますけれども私は私として、なにより眞面目たれと敎へられたことを、一番悅むでゐます。私の病氣は、私にこの實際の言葉を、死なせることなく用ひさす方便に私を「苦痛」だとか「憂愁」だとかの傍りに追出したのです。私はそれの言葉のなかゝら恐ろしい罪惡迄作り出させてゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのです。けれども私はその時すでに「眞面目たれ」を戀してゐました、探してゐました、欲してゐた。少しでもその分子を自分のものにして置きたかつたのです。

私は只眞面目こそ最後の勝利だと堅く誓つてしまつたのです。

病氣の宣告を受ける前の私の生活を見て下さい、今になつて知る不眞面目な行爲たつたのです。なんにも成らない生活でした。私は今迄自分のやつて來た仕事と行ひについて全く大きな聲で話せない程耻かしかつてゐます。けれど人に對してちやないのです。只自分自身に向かつての耻かしさです。

私が不眞面目なことを臆面もなくして來たことについて眞面目たれの言葉を迎へるのは決して社會の凡てに對しての言葉ぢやないのです、私自身への言葉なのです。

私は今自己に忠實でありたいのです。私が東京に歸へつてから私の血液の血球のどれもこれもは「私の私が眞面目たれ」で身體の凡てを元氣よく廻つてゐます。

秋になつてゐるんです。私はいい時退院が出來たと悦むでゐます。

私は、どこ迄自然は好い工合に、かくも上手に私達をとりあつかつてゐるかと云ふことが今更らしく感じられて來ました

描きたい、描け、描こうと、これたけの動きが今月の文展製作にピリピリしてゐたのです。

今年の春からこつち私は描きたい氣分でそつちの神經はどれもこれも尖つてゐました。

文展なんか別段どうでもないのです、あれは私の畫と氣分には全く交渉がないのです。私が製作が出來ないで、いつ迄經つてもそれに付いて未練と執着のあつたと云ふことは、あんなに緊張してゐた描きたい、描け、描こうと云ふ氣分が不意に病氣なんかの爲めに破壞されてしまつたからなんです。別段文展に出せなかつたからと云ふ理屈のものぢやないのです。

三四日前でした、思いがけなく長沼さんに逢つたのです。その時長沼さんは近頃は只畫が描きたい、描きたい、今度はきつと描けるでしようつて、しきりに話してゐらした、私は其の時、それたけの氣分を倍の倍にして羨やましく思いました。

そんな様に凡てが充實しきつて、そして出來上つた作品はどんなに尊いものでしよう。

私達にしたつて、そうして出來上つた作品の前に面とむかつたら、どんなに氣持が好いでしよう。私は一人でも多く充實した、自分を信じた、そして露骨な「作品」を作り出す人が增して行くことを待つてゐます。

今度讀賣新聞社の樓上で高村光太郎氏、齋藤與里氏、淸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

宮彬兄等の尊い藝術品を澤山同時に見ることが出來るそうです。
私は、早くそれら尊い個人個人の作品に接したいと毎日それぱかり樂しみにしてゐます。

私は誰も知らない、自分たつた一人で大切にしてゐる面白い氣分があるのです。
よく考へて見ると、その氣分は幼い時からずつと今迄續いて來てゐたのです。これから先きもどんなにそれが育つて行くことか樂しむでゐます。人が知つたら、恐らく危險たとか狂人地味た奴たとか一種の病的たろうとか位いで濟ましてしまうでしよう。
私のその事が世間に出ると不眞面目なものに取扱はれて冷笑の内に葬らはて行くものたと考へてゐます。私が銘酒屋に行つたとか、吉原に出かけたとか酒場に通つて強い火酒に醉つたとか云ふことは其の大切にしてゐる氣分の指圖になつた惡戯（わるふざけ）なのです、薄つ片らな上づつたあれらの幼稚な可哀いい氣分を世間の人達は隨分面白く解釋してゐます。
私は自分を信じてゐます。それたけに自分以外の人達には平氣で僞をついてゐます。
そのくせ私は人の言葉を妙に心配したり氣に懸けるのです。
凡俗以下の私と云ふ人間がどうかしてその通りに他人の頭に入つて行きたいものです。私は本當に他人からよく間違つて紹介されて來てゐます。

初めて會つた時私の知つてる男はきれいな髮の毛を、つつましう結むで上げてゐました。
町が變つた或る國で二度目に會つた時にその人は髮の毛を首の處迄切つてゐました。
東京で三度目に歸へつて會つた時に私は其の髮が一層短かく摘まれて、ちりちりに卷上つてゐたのに氣をつけてゐました。
最後に私が眞面目な姿で會つた時に彼れは髮の毛を綺麗に散髮して見るから優しい青年に生れてゐました。
なんにもならない生活程貧弱なものはないのです。私はその生活に短い時ながら浸つてゐました、醉つてゐました。そして今になつてやつと「なんにもならない生活」をしみじみ口惜しく思つてゐます。私はせめての事髮の毛の有つたことを嬉しがつてゐます。
私が或る時或る場合の行爲は、私自身勝手に覺へた彼の男の髮を切つた以前の氣分の一粉沫たつたことを斷つて置きます。

なんといつても秋です、秋が來てしまつてゐます。貧弱な生活はなるべく見合して行きたいものです。

九、二二、——あさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜研究會

□社員外の婦人も聽講が出來ます。

ダンテの神曲（水曜日）　承前　阿部次郎氏

モーパッサンの短篇（金曜日）　承前　生田長江氏

講話　諸氏

□十月第一水曜日より開始

□毎週、水、金、午後一時より三時迄

□會場は本郷區駒込蓬萊町萬年山（勝林寺）內本社事務所

□會費一ヶ月金五拾錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□久しく休暇だつた研究會を十月から又始めます。在京社員は勿論社員外の方も皆つて御出席下さい。今度は書物以外に阿部生田兩先生の御話は勿論折々他の先生方の御話も願ふことになりました。日時其他のことは編輯室よりの前で御承知を願ひます。

□入社御希望の方は本誌掲載の青鞜社概則を御讀み下さい。

□青鞜社の原稿用紙は東雲堂の不勉强で少し遲れました。併し四五日の中には出來ます。

□新に入社せられし方、中津江天流(てる)、岡田ゆき、片野珠、三島塔、高木意靜、伊藤野枝

□青鞜社の事務、發賣のことは總て東雲堂にまかせましたから講讀費も社費も其方へ御送り下さい。振替番號の變つたことにも御注意を願ひます。

□青鞜は第二卷の第一號から揃つて居ます。御望みの方には一部十錢に御讓する筈。これも東雲堂の方へ御注文下さい。第一卷はもう賣切の爲、御望みに應ずることの出來なかつた處の多かつたのは殘念です。

□佐世保の社員の上野葉子さんが御夫婦[illegible]京されたので早速私共は[illegible]ました。原[illegible]手紙の上での想像から頭の中に出來上つてゐた上野さんと實際の上野さんとどれ程違ふかと始めて逢ふと云ふことがたのしみでもあり、不安でもありました。元氣のいゝ氣焔家で、そのくせ神經質で、肉のしまつた瘦せた方で、大きな聲で話をするどこかきちんとした方だらうなどゝ考へてゐると、やがておつとりと落付いた、思つたよりは大變やさしい小母さんとでも呼びたいやうな方が靜かにはいつて來られたので、あの方が上野さんとは其時一寸頭に浮んで來なかつたのです。初對面の挨拶などは我々の仲間は至極簡單なもの。やがて色々の話に花がさきました。青鞜のこと、女のこと、文學のこと、宗教のことなど話はそれからそれと盡きません。上野さんは全く眞面目な熱心な方だと何かなしに力強い氣がしてうれしく思ひました。どこか爭はれない高師出身者だといふ感じもしきりにしました。もつと頭のある女を造らればいけないといふことや、青鞜をもつと範圍を廣くして文學、哲學、宗教、教育等廣く思想界の問題に亘るやうなものにしたいといふやうな希望をしきりに述べてゐられました。

□この日初對面の方に三島塔子さんがあつた。華やかな、美しい娘さんである。この間まで帝劇に居られたのださうな。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

□紅吉は上野さんから青鞜を眞面目にやつてくれさいふやうな葉書をもらつたさかで怖がつてゐたけれご逢つたらそれが全く杞憂であつたことが分つたさ云つてゐる。上野さんは茅ケ崎にゐるさばかり思つてゐた紅吉が出席したので大變驚いてゐられた。そしてよろこんで下さつた。

□ビールを一番澤山呑むたのは矢張らいてうだつたた。病氣で飮めない紅吉の分までつさめる氣なのだらう。

□會の半にらいてうの煙草入紛失事件がもち上つて總立ちになつた。印度更紗の煙草入で其裏には色々のことが隠れてゐるのださからいてうにさつては命よりそれは大切なものなのだ。皆して捜したが不思議にも見當らない。だん〳〵らいてうの顏色が蒼くなつて來たので氣の毒になつたさ見えて上野さんはさうさ懐から出して仕舞つた。

□上野さんはらいてうをつかまへて結婚したつて決して失望するものぢやない、ミスの時考へたことは大方杞憂に過ぎなかつた。など〻昔にらいてうに結婚を勸めてゐた。らいてうは結婚をしたらごんなに淋しいでせうなんて言ふこ、さうぢやない、けれご矢張執着がなくつちや結婚したつて駄目ですよなんてさんだ處で上野さんはおのろけをきかせてゐた。こんな話の間、只クスリ〳〵と笑つて頭ばかり撫でてゐるのは紅吉だつた。

□初對面の上野氏と紅吉を連れてらいてうが萬年山を出たのは追分町の通りに綺麗に明りが入つてゐた時です。八百屋の店には可愛らしい梨と眞白く粉のふいた甲州葡萄が青白い瓦斯の光りの下にまばゆさうにおさなしく並むでゐました。田村さんのお土産を梨に決めて友染のきれいな風呂敷に買つて、林町の通りを眞直に谷中の墓地に行きました。途中で紅吉が一軒一軒道具屋の店をのぞき込むで二人を餘程弱らした樣です。田村さんの家は墓地の横なんです。隣りは機械の音のやかましくする小さな工場の樣でした。丁度御主人と女中がお留守、田村さん一人寂しさうに奥の座敷でなんだか讀むでゐらつしたやうです。本當に紅吉は大きいのれつていきなり浴びせかけられたそれだけで、もう紅吉はおごついて上野さんと二人玄關で大分まごついてゐました。

いつか瓶汗洞で見たことの有る樣な姿の「おれさま」が本箱と床の間に踊り出す樣に飾つてあるのです。紅吉はいきなり「紅吉におれさまを一つ作つて下さいれ」と初めて會つた田村さんにねだり出したのです。

田村さんは次の間の簞笥の引出から本當にうつくしい娘さまを出して紅吉に下さいました。紅吉は好い事を

したつてな樣子で上野さんは見てゐました。田村さんはいつ逢つてもらいてうが好きなんださうです。その晩も隨分面白い話しがありましたつけ、上野さんは歸へる迄萬年山さまゐきり逢つておとなしく椽側に添つてキチンと座つてゐらつした。紅吉は姐さまを持つて艶のいい犬を相手に、それもここはここは次の室で遊むでゐました。此の夜紅吉は初めて田村さんに逢つたのです。玄關に入る迄只恐ろしくこわがつてゐましたが逢つてからはその心配がなくなつたさうです。けれどいつ何時どんな痛い言葉を聞かされるかそれが只心配なんださうです。遂に十時近く迄遊むでゐました。

日暮里の停車場でらいてうは巣鴨に、紅吉と上野氏は上野に別れました。

それから二日目に田村さんからこんな詩が來た。紅吉はフフフンと聲を出して笑いました、そしてこの詩はいけませんよいけませんよと少し不平らしい。

逢つたあと

紅吉、
おまいはあかんぼ――――たよ。
この――――の長さは
おまいの丈の高さと、
おんなじ長さ、さ。

紅吉、
おまいの顏色はわるいれ。
まるで、すがれた蓮の葉のやうだ。
Rのために腕を切つたとき、
それでもまつかな、
赤い血がでたの、紅吉。

紅吉、
おまいのからだは大きいれ。
Rと二人逢つたとき、
どつちがどつちを抱き締めるの。
Rがおまいを抱き締めるにしては、
おまいのからだは、
あんまり、かさばり過ぎてゐる。

紅吉
おまいの聲はさんきよだれ。
けれど、金屬の摺れるやうな聲だ。
おまいの、のつけに出す聲は、
火事の半鐘を、
ふと、聞きつけた時のやうに人をおどろかせる。

紅吉、
でも、おまいは可愛い。
おまいの態のうちに、
うぶな、かわいいこころがあるのだよ。
垂れた両手をあめのやうにねぢつて、
大きな顔をうつむけて、
はにかみ笑いをした時さ。

□いつか田村さんに話した紅吉の詩つていふのはこれなんださうな。

夢の路たどつて、

橘を越して、向河岸の待合で赤い衣きた
女を抱いて寝た男が紅吉によく似てゐた。

魂抜かれたでく人形が今日も今日とて、物憫さうに、
破れたギターをたゝきつけて、あつちこつちとさま
よつた。

レストランの暗小路で、眞白い白粉の女にばつたり
會つた。それがどうやらFの話した田村俊子のよう。
（まだ長いのだけれどこれ丈。）

□紅吉の病氣に就いて皆さんから毎々御見舞頂いて誠にありがたく満足してゐます。

□皆が自分に紅吉さんの御病氣は其後如何です。紅吉さんによろしくなどと云つてくれるのはまんざらいやぢやないとらいてうは言つてゐます。

□らいてうの室に近頃一枚の油繪がいつもきちんと同じ場所に飾られてゐます。

繪は紅吉に云はせるとどうやら少しばかり要領を得ないものらしいのですが此の畫については至極面白い話が隠れてゐるんださうです。しかしそれも無暗に尖つてゐる紅吉の神經が思はせたのかも知れません。なんでも或る若い、自分から「若い燕」といつてゐる人から贈られたものださうです。三色版にでもして青鞜の口繪にしたらなんて紅吉は不安さうな眼つきで交ぜつ返へしてゐます。しかし「若い燕」は今何處の空を飛んでゐるのか全く分らないんですつて。

□病氣になつてから以來紅吉は大變神經が尖つて來ました。とても常人の想像以外で、途方もない思ひ違ひをして騒ぎ立てるので、白雨もらいてうも幾度かドキモを抜かされたものです。らいてうも一時は随分困り抜いて腹を立てる譯にも行かないしなんて。

□この頃ぢや紅吉も可成規則的に仕事をやつてゐるさうです。此雑誌が出來上つた頃には紅吉はどつか効外に一人で移つて養生方々勉強する筈です。淋しがりやの紅吉の困り方が今でも眼に移つてゐます。けれど本人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は至極眞面目になりすまして平氣でゐますが偖さなると、さぞ困り出すでしよう。

白雨は紅吉がなるべく規則的にやる樣につて隨分心配してゐます。

□長い間茅ヶ崎にゐた白雨もいよいよ今年で切り上げて歸京するそうです。我儘者の紅吉を二ヶ月もお守りした伯母さん役もさぞ疲れたことでしよう。二三日前白雨から手紙が來て、あの紅吉がゐなくなつてから俄かに南湖院が淋しくなつた、私が獨り室にでも本を讀むでゐると今にでも大きなあの聲で「伯母さん」つてやつて來そうな氣がしてならない、紅吉はどうしてゐますか、と書いて有りました。

早く歸へつて來て欲しいものです。けれど伯母さんは南湖院の花をみんな綺麗に咲かせてからたつていつてゐます。

今は隨分いそがしいんだそうです。

なんといつたつて六十日も紅吉のお守りで伯母さん自身の用事つたらなに一つしてないんですもの、秋が來たのに袷も縫い上らないのです。本當にどんなにか迷惑だつたでしよう。

□今度の編輯に勝ちやんを手傳ひに來て欲しかつたので紅吉は、青鞜の來月號もあなたに依つてどうなるか知れないと書いてやつたら勝ちやんはその晩おちおち眠れないで翌朝らいてうの家に本當に心配らしい顔つきで飛込むで來たそうな、編輯〆切の多忙な日もどうやら半分助かつた。けれど勝ちやんは隨分ひどいわつて紅吉を恨むでゐる。

□來月あたり木内さんが一葉論を出される筈です、此の間の晩らいてうと可成り盛むに話合つてゐらした。一葉を自分の姉さんの樣だつて、あんな一葉崇拜者は今の世の中ちやないでしよう。一葉の何週忌とかが十月の何日だからそれが濟むと一葉論をかきますつて、命日命日にいつでもお墓詣りをしてた人だつたが或る友人に一葉の墓つて別にあるのかと聞かれてからなんだか先祖代々の墓所におじぎするのも能がない樣だから、それからお墓詣りは見合せたのだそうな。

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本郷區駒込蓬萊町萬年山内に置く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第四條　本社は社員贊助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に贊同したる女流文學者、將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす。本社の目的に贊同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす。

第六條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び贊助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし。

二、時々社員の修養及び研究會を開くこと但し贊助員の出席隨意たるべし。

三、毎年一回大會を開くこと大會には贊助員客員を招待し講話を請ふことあるべし。

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月東雲堂宛に納附すべし。入社の際は原稿を添へて事務所宛に申込む事。

第八條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。

第九條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十條　係員は再選することを得。

□寄贈雜誌及書籍

三田文學	早稻田文學
北方文學	モザイク
劇と詩	藝文
みづゑ	シバキ
スバル	東洋時論
歌舞伎	ザンボア
紅塔	俳味
六號雜感	短歌
十善寶屈	學燈
さりで(創刊號)	奇蹟(創刊號)
ホトトギス	新人
詩歌	アララギ
殖民地より	新女界

陰影　著者　前田夕暮　發行所　白日社

氏の第一歌集「收穫」以後の作、約六百首を集めたるもの。

宗教の眞髓　著者　林空水　發行所　庚寅新誌社

現代文士録　發行所　育英舍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行

■定價一冊金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）

■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

■社費は一ヶ月金參拾錢にして毎月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝを便宜とす。

■廣告料（一頁）拾五圓　半頁（八圓）

■振替貯金口座は（東京五六一四）に拂込まれたし。

■郵劵代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと。

■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は萬年山内青鞜社へ。

■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。

■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正元年九月三十日印刷納本
大正元年十月　一　日發　行

東京市本郷區駒込蓬萊町萬年山内
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷所　文祥堂

禁轉載

編輯所　東京本郷區駒込蓬萊町萬年山内　青鞜社

發賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店　電話京橋一六三九番　振替東京五六一四番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

注文如湧

山路愛山新著

御家騷動叢書

第一篇

伊達騷動記

定價金壹圓　送料（內地金八錢　清、鮮金三十錢）

!! 大好評忽三版發行 !!

第二篇

加賀騷動記

出來仕候

クロース製　箱入美本　定價金八拾錢

◎發送注文順◎

本叢書は史實に精通せる愛山先生が一々典據ある事實に依り正確に且つ面白く該、御家騷動の眞相を、先生獨特の筆致を以て記述せられたるもの、婦人小供の愛讀書たるを得るのみならず、之を精讀せば、歷史に通じ加へては當時天下の形勢をも知るを得べし、されば家庭並びに學校に於ける子弟敎訓の材料こして、果た小閑の日の慰み本こして學校家庭必備の叢書なり。

發行所　東京神田小川町四一　振替東京一二三三六

敬文館　電話本局一、四四二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歌集

悲しき愛

富田砕花著

■齋藤與里裝釘
■梁田貞作曲
■澤崎完之作曲
■弘田龍太郎作曲
■牛山充作曲

「内容目次」

■逝水賦
■悲しき愛第一
■悲しき愛第二
■斷章
■足跡

混亂歸趣する處を知らざる現代短歌壇にありて一路飽くまでその信ずる道程を突破し來たれる著者の第一歌集也。饕餮醉酒の徒は以て肅然襟を正すべく一巻七百餘首殆ごと之れ高調せられたる戀愛詩ならざるなし。敢て薦む。

菊半截形頗美本
新式イポント活字組
本文三百頁餘
歌數七百餘首
木版挿繪數枚
定價金七十五錢
郵稅金八錢

發兌

岡村書店

東京市淺草區下平右衛門町
電話下谷四二〇四番
振替東京一九〇六五番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本誌を備へざるは家庭の缺陥也

女學世界

十一月一日 第十三號 正價廿錢

郵二●金税四八六八一六一一十卅圓二
税錢前郵共冊十錢冊圓十錢六三十錢

つむじ風

元祿姉さん

■處女に別る、記　花散里
■洪水來る　松平鏡子
■繪もの語破れ芭蕉　太田三郎
■婦人避暑貯金　並木英子
■おさつの局　右京太夫
■戀の八郎潟　ちさる

▼風俗かゞみ

磯千鳥

○料理文盲手引　小泉迂外
○京都の美ご大阪の美　茅野雅子
○裁縫所の豫備試驗　松風
○妻の計略　玉かづら
○秋茄子の價　野菊
○覺え帳　松平鏡子
○離縁の原因　山桃子
○可驚高價藥の產地　反蓮花

●おもかげ草紙　玉露
●藻汐草　蜑乙女
●ゆく秋　山茶花
●學校の優等生
●女流の名句　岡本松濱
●雜記帳　諸三世
●童貞人名錄
●秋凉の御馳走　花外

一人一話

黒岩涙香
徳富蘆花
喜三
大原良太
赤法師
木村開作
小原せい
諸氏談

振替東京二一四番

東京本町
博文館

電話本局三百三番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

作品を諸君に見て頂き度い目的で銀座一丁目の讀賣新聞社の三階で展覽會を開きます

ヒユウザン會展覽會

自十月十五日至十一月三日
每日自午前八時至午後四時

岡本歸一　長沼ちゑ子　山脇信德　川上涼花
瓜生養二郎　萬鐵五郎　齋藤與里　山上鐵之助
岸田劉生　三並花弟　埴原粂喜代　大野隆德
山本正二郎　高村光太郎　宮崎省吾　有島壬生馬
清宮彬　小林德三郎　濱田葆光　中島善太郎
松村巽　眞田久吉　木村莊八　下川理一
川村信雄　大和田磐　中村彝　井田繁三

KIRI-NO-HANA.

桐の花

抒情歌集

北原白秋氏著及畫

本文朱黒二度刷……歌二百余首及歌論
挿畫圖畫數十種……裝幀 薄紫と白の瀟洒
定價金八十五錢……送 費 金 六 錢

凡てこれ快くして悲しき氏が内心の息づかひと清新なる感觸の記錄なり。今や新裝成る。

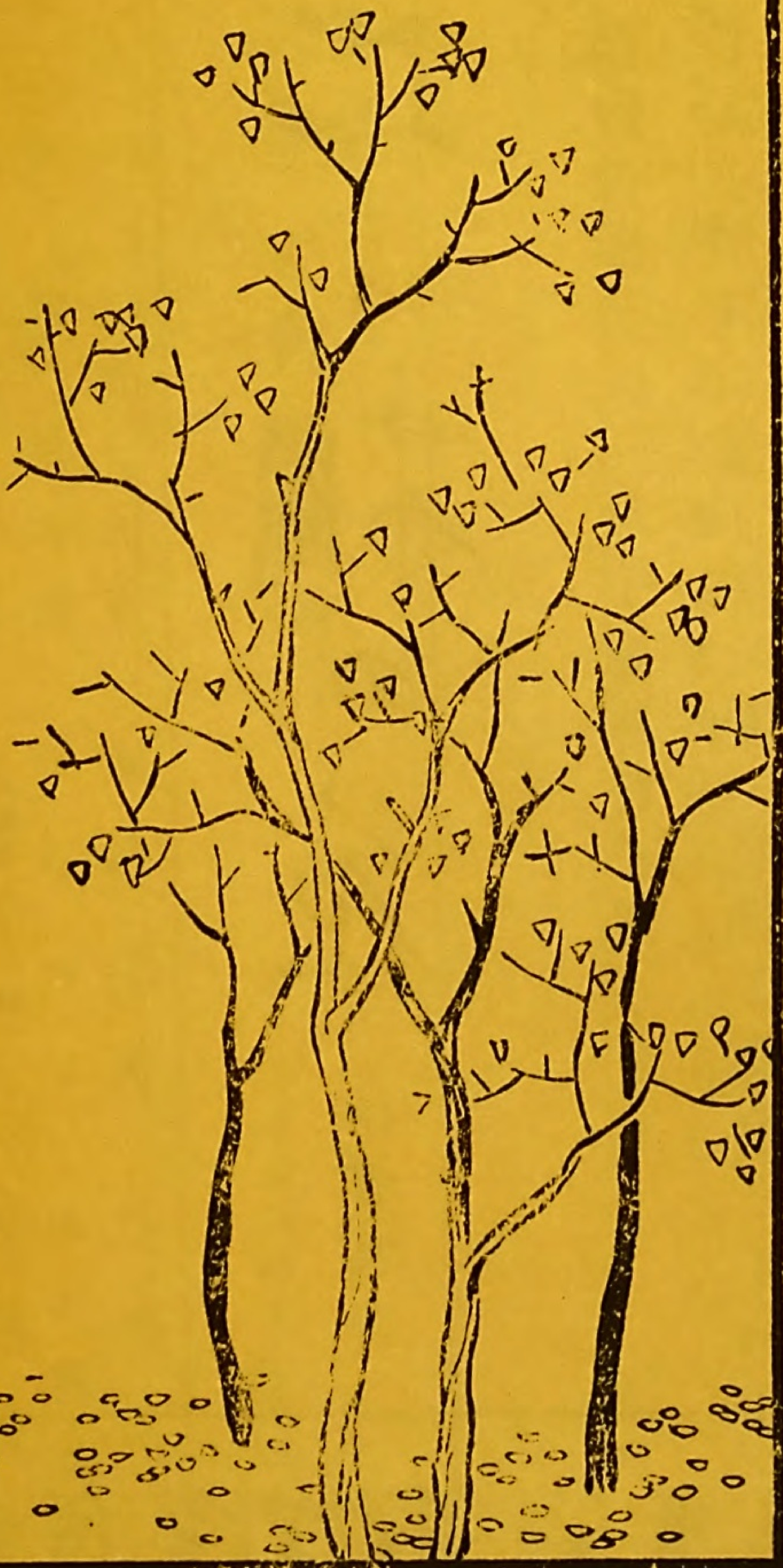
發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番） 東雲堂

歌集

死か藝術か

新裝發賣

東京京橋區
東雲堂



若山牧水氏著

內容

手術刀
落葉と自殺
かなしき岬

裝幀

四六判總クロオス美本
定價金七十錢
送費金八錢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉井勇著

水荘記

山脇信德畫
齋藤與里畫

内容

■ 水荘記
■ 苦痛の谷
■ 山上哀話
戯曲「無智の序」
湘南秘事
七尺牘
■ 海郷異志 ■ ■

十月十日出版

奇しく凄艶なる七篇の物語を收む。

菊版頗美本
本文黑青二度刷
挿畫二葉
定價壹圓
郵税八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■ 石川啄木遺著 ■

悲しき玩具

再版發賣

若くして逝ける天才詩人の面影を傳ふる唯一の書にしてまた實に薄命なりし著者の内面を映せる悲しくも明らかなる鏡なり。

四六判天金美本

定價五十錢送費四錢

第一歌集

一握の砂

賣切

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替貯金東京五六一四一番 東雲堂

地下一尺集第一

木下杢太郎著

和泉屋染物店

富本憲吉氏装
鳥居清忠氏畫

四六判函入
挿畫三葉
定價壹圓
小包八錢

戯曲六篇

- 和泉屋染物店
- 醫師ドオバンの首
- 溫室
- 燈臺直下
- 印度王と太子
- 十一人の偏盲

新刊

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

詩壇に
EPOCH
を
劃せる
書

歌集

別離

若山牧水著

第四版發賣

小形著者肖像入美本
定價金七十錢
送費金六錢

抒情小曲集

思ひ出

北原白秋著

第六版發賣

小形朱黑二度刷美本
定價金九十錢
送費金六錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幽玄なる象徴體詩集

白き手の獵人

十月出版

三木露風著

正宗得三郎装
阪本繁次郎講

四六版顛美本
定價八拾錢
郵税金八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替貯金東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

朱欒

第二年
第十號

實價廿五錢
送費二錢

十月號內容

わるい花（レミ・ドゥ・グルモン）……上田敏氏
詩數篇……蒲原有明氏
詩……高村光太郎氏
橘の實る國（小説）……數瞋數喜生
烏龍茶（感想）……三木露風氏
曙の小鳥の啼聲（戲曲）……佐々木繁氏
題未定（小説）……里見弴氏
ぬくもり（小説）……西村小徑氏
青磁古甕の歌（譯詩）……増野三良氏
苦悶の數日（詩）……服部嘉香氏
朱欒詠草及詩……
白猫（散文）……北原白秋氏
ふさぎの蟲（散文）……北原白秋氏
續哀傷篇（歌）……北原白秋氏
詩數篇……北原白秋氏

發行所　東京市京橋區南傳馬町　振替貯金五六一四番　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌 黒耀

吾等若き藝術を愛慕するもの相寄りてこの雜誌を出す。吾等は常に自由に常に生氣あらんことを欲す。

モンスター社同人

創刊十月一日號内容

■F（戯曲）……國枝史郎
■秘密のないスフィンクス（飜譯）小澤愛圀
■浮世床（小説）……西村小徑
■築山殿（戯曲）……服部塔歌
■薔薇と蝦蟇（飜譯）……植松貞雄
■密林と夜の雨（歌）……金澤種美
■病床にて（小説）……佐野良太郎
■キルウダカの叛逆（戯曲）……久末純夫
■長廊下（歌）……皐月草三
■歌壇近頃の感想（評論）……金澤種美
■孤獨より（感想）……西村小徑
■トマトと熔岩（歌）……砂原塔三
■空語を排す（評論）……馬場孤蝶
■涙……塔歌
■九月歌壇の印象……種美
■近代劇協會の稽古……史郎
■PARLERIE……純夫
■月光と小鳥……史郎
■樂屋落……同人

■菊判二百頁本號に限り特價卅五錢■

發賣所 東京市京橋區南傳馬町三 東雲堂

編輯所 小石川區竹早町百十八植松方 モンスター社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三卷第十號

白樺

十月號

十月一日發行

定價三十錢 ● 送料一錢五厘 ● 半ケ年前金一圓七十錢 ● 一ケ年分三圓三十錢

目次

▲一人の死（戲曲）……萱野二十一
▲個性に就ての雜感……武者小路實篤
▲漆の樹（詩）……北原白秋
▲グレーに行つた事……津田青楓
▲田舍より（四）……南薰造
▲緣日（小說）……正親町公和
▲六號雜感……平澤仲次
▲編輯室にて……白樺同人

挿畫（オノレ、ドーミエ）

▲テオドール、ルソーの肖像
▲芝居
▲ドンキホーテ
▲一家族
▲習作

發行所 東京麴町區麴町二ノ二 振替東京二〇一九四番 洛陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第四年十月號

スバル

定價三十錢　郵稅二錢

雁（小説）　森鷗外
計畫（小説）　平出修
金魚（小説）　五百歌左二郎
死の勝利（小説）　石川戲庵
背教者（小説）　北尾夕街
アラヂンとパロミイド（戲曲）　灰野庄平
崖（戲曲）　古原若水
魂の聲（詩）　山本禿坪
萬造寺君に　江南文三
幼き旅人に（詩）　竹友藻風
ある詩の序（詩）　出野青煙
青き魚を釣る人（詩）　室生犀星
木屋町より（小品）　長田幹彦
湘南秘事（歌）　吉井勇
椋鳥通信　無名氏
歌　昴詠草
裏繪（秋の花）　濱田藻光

東京神田區北神保町　昴發行所　電話本局四二六四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊 藝文 雜誌

大正元年十月號　十一月一日發行

定價一部郵稅共二十二錢　半年分一圓廿錢　一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學内京都文學會の機關雜誌にして東西兩洋の學術文藝に對し最も謹嚴深刻の批判を下さむとするものなり

四体佛典　文學博士　松本文三郎
帖木兒と永樂帝　文學士　羽田亨
かぎつけるもの　竹友藻風
二つ井戸　文學士　加藤重吉
希臘クリート島の發掘　文學士　濱田耕作
アンリ、ド、レニエ　文學博士　維舟生
ポアンカレ　文學士　西田幾多郎
「梁塵秘抄」を讀む　文學博士　重山生
聖教日課　文學博士　上田敏
ポアンカレ肖像　口繪

發行所　東京小石川原町六　振替東京一三五三　電話番町二六八　鷄聲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊金廿五錢
郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雑誌

歌舞伎

第百四十八號（十月一日發行）

六冊前金郵税共
一圓五十錢
十二冊金二圓八十錢

九代目團十郎の事……岡野紫水
戯曲「僧院」（フエルハアレン作）……鷗外譯
ロンドンの劇場と觀客……市川又彦
「焔の流れ」……和田魚平
演劇雑感……相馬御風
默阿彌著作解題……河竹新水
歐洲風俗劇の濫觴……河瀬喜代美
神崎與五郎の型……鈴木春浦
戯曲「キヨツツ」（ギヨオテ處女作）……鷗外譯
名優遺筆の第一としての寶暦三星……松廼舎所藏
芝居の幕……關根默庵
芝居覺書の一片……石井三禮
改元後の大芝居……青々園
改元後の小芝居……春浦生
榮次郎は死んだ……山野芋作
脚本「熊と人」……川村花菱作
脚本「羊」……渡邊未灰作

東京本郷切通坂町 書報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三番
振替口座一八一〇六番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回 一日發行

◀ 十月一日發行 ▶

美術新報

第十一巻▲第十二號

價三十錢 税錢五厘

時言……威嚴ある趣味

新時代の作家(八)鏑木清方氏 坂井犀水

椅子の話(下) 富本憲吉

アルブレヒト、デュレルに就て 湯淺一郎

新建築印象記(四)東京倶樂部 黒田鵬心

京都奈良の十日(下) 犀水

繪畫

チャイルド、ハッサム筆 ナスタルチーヤムの一瓶 原色版

アンダアス、ゾルン筆 自畫像 網目版

鏑木清方筆 一葉女史の墓 原色版

アルブレヒト、デュレル筆 アダムとイブ 網目版

……………… 橘夫人念持佛背屏 アアータイプ

泰西現代巨匠傳叢(十八)チャイルド、ハッサム 森田龜之輔

洪牙利の美術工藝 菅野眞

豐川楊溪氏と螺鈿 一記者

初秋の諸展覽會 浦仙生

文展出品者成績一覽

時報

發行所 東京市本郷區湯島切通坂町 畫報社 電話下谷二四八三番 振替東京一八一三六番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十六卷　十月號　第十號

九月十三日の夜　芳賀矢一
悲しき御幸　前田利定
倭冠時代の俗謠　新村出
小妖魔　吹田盧風
夜に捧ぐる歌（ノヴリス）　出野青煙
少きアイヨルフ（イプセン）　草野柴二
橘守部傳　橘純一
橘守部傳の奥に　佐々木信綱
橘守部と船曳大滋　彌富濱雄
鞭　橘糸童子
夢　片山廣子
桐杖　石榑千亦

定價一部十三錢税一錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一

振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本誌は本邦最古にして且唯一の水彩畫研究専門雑誌なり

月刊美術雑誌
十月三日發兌

みづゑ

第九十二
コスモス號
一部金五十錢

水彩畫を描く人は勿論愛好せらるゝ諸君は座右に本誌を欠く可からず

感想と講話

石川欽一郎
服部嘉香
發泙永
戸張孤雁
織田一磨
奥村博
田澤操子
相馬御風

鵜澤四丁
山崎紫紅
坂本繁次郎
山宮允
藤田紫舟
後藤工志
比奈地畔川
其他

□放牧場の一部……（水彩畫原色版）……赤城泰舒
□赤い本とシネラリヤ……（仝）……吉田豐
□午前九時……（仝）……水野以文
□影の水……（仝）……瀧澤静雄
□夜の静物……（仝）……寺田季一
□坂本公園……（仝）……後藤工志
□朝……（仝）……相田寅彦
□鐵道草……（寫眞版）……尾崎影郎
□海岸……（仝）……長谷川曽一
□澤の秋……（仝）……望月省三
□驛……（仝）……吉崎勝

發行所 東京小石川關口駒井町三 振替口座東京三九六三番 春鳥會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第五卷
第十號

アララギ

十月一日
發行

○戀の歌（短歌） 中村憲吉
○河原ははこ（短歌） 柿乃村人
○雨の夜（短歌） 土屋文明
○富士ゆき（短歌） 古泉千樫
○わかれ（短歌） 齋藤茂吉
○叫びと話（歌論） 伊藤左千夫
○思ひ出る折 齋藤玉男
○山家集私鈔 齋藤茂吉
○記紀短歌小解 古泉千樫
○八九月の歌壇 千樫
○短歌雜論 齋藤茂吉
○アララギ歌壇 同人
○信濃の歌 信州同人
○海邊にて 茂吉
○奈良より 長塚節

定價一冊十五錢 ● 半年八十五錢 ● 一年一圓六十錢

○注文は東京本所區緑町三丁目三十石井方古泉千樫宛
○投稿は東京赤坂區青山南町五丁目八十一齋藤茂吉方

東京根岸短歌會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歐洲文藝の粹

詩と劇

毎月一回 一日發行

定價一部 二十五錢

十月飜譯號要目

シュニッツラー論……パーセヴァル、ボラード

太陽の子……ゴルキー作 秦豐吉譯

因果應報……ガルスウォージー 市川又彦譯

アレクサンドル ブロークの詩……米川正夫譯

搜索……ソログーブ作 長澤武男譯

未定……佐藤綠葉

緣の兜……イエーツ作 仲木貞一譯

短歌……若山牧水 土岐哀果 選

同人偶語……東明、貞一、夕咲、暮鳥、省吾、藤朝、

前月文藝評……久雄、楚白等 同人

表紙畫……柳敬助

大賣捌 東海堂、至誠堂、上田屋 北隆館、良明堂、盛春堂

發賣所 東京神田區表神保町 東京堂

編輯所 東京小石川區雜司ヶ町 劇と詩社

第七號 **現代の洋畫** 十月號

挿畫と記事

■色刷(原色版)挿畫

行者……倉田白羊
靜物……木村章
遊歩地……ジノ・セヴエリニ
旅の印象……
モニコなるパンパンダンス……
近代的偶像……アムベルト・ボツシオニ

■寫眞版挿畫

黑猫……ジノ・セヴエリニ
同時に起れる現幻想……アムベルト・ボツシオニ
笑ひ……
行き去る人……
詩人マリネツチの肖像……カルロ・デー・カルラ
芝居がへり……
故渡邊與平氏の遺作數點其他……

■記事

未來派に關して……齋藤與里、木村章、岸田劉生、其他執筆
上野に於ける二故人の展覽會を見る……
理想的展覽會の要求……松村斐
素人へ……山本正一
其他に高村光太郎氏等の執筆になるものを掲ぐる筈

■發行日十月五日頃になります

■定價三十錢郵税一錢半

理想的の講義錄出づべし

洋畫研究錄

毎月發行
二回一日
十五日

■洋畫に關する總ての講義は簡單明瞭を旨とし、初學より漸次進歩に伴ひ教授を進め滿一ヶ年にて卒業します。

■講義の科目や大体の内容、講讀の手續、會費等は「洋畫研究錄見本」の中に詳しく記述してあります。

■見本は來る十五日より御申込の順により配附します。

但し申込は往復ハガキに限ります。

發行所 日本洋畫協會
東京市牛込區水道町五三
振替東京四三七三番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

詩歌

特別短歌號
特價金參拾錢

本號執筆者 十月一日發行

三井甲之　水野葉舟　窪田空穗
尾上柴舟　若山牧水　吉井勇
土岐哀果　山村暮鳥　服部嘉香
齋藤茂吉　米川正夫　田波御白
內藤晨露　秋元盧風　白鳥省吾
富田砕花　新妻莞　近藤元
尾山篤二郎　細谷明　廣田樂
狹山信乃　前田夕暮　社友短歌千餘首

每月一回一日發行
定價半年分金壹圓貳拾錢

社友募集

白日社清規入用者は往復葉書にて白日社宛申込まれたし

陰影

前田夕暮著
正宗得三郎裝

■新裝發賣歌六百首

灰色のこゝろのうへに悲しみの花
うす紅み咲きいでにけり

■定價金八拾錢送費金六錢

東京市外西大久保
白日社發行

東京市神田區表神保町
東京堂發賣
振替東京二七〇

毎月一回
一日發行

モザイク

定價一冊
貳拾五錢

拾月號內容

ラ・フォスタン……(小說ゴンクウル)……武林無想庵譯
和蘭陀小町……(小說)……水島爾保布
黑い蝶……(小說)……西田廻瀾
鐵橋の上……(小說)……五十嵐禎夫
旅客……(小說)……秋庭俊彦
あけがたの雨……(詩)……川路柳虹
理智と神秘主義……(評論)……太田善男
幽閉……(戯曲)……井田弦聲
鴉の死……(獨白)……山本露葉
卓上より……(批評)……モザイク同人
表紙繪……小泉靑堂
裏繪……中尾春雄

東京市下谷區　モザイク社　中根岸町六九

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一卷
第二號

奇蹟

定價
廿五錢

十月號

▲夢（小說）……相馬泰三
▲血（小說）……峯岸幸作
▲犧牲（ウェデキンド）……廣津和郎
▲感想……眞田久吉
▲彼の戀の經路……舟木重雄
▲別れ（戲曲）……川村花菱
▲あくび（小說）……岡本春朝
▲圓覺寺內（小說）……葛西歌棄
▲官能の春（詩）……秋野優
▲同人獨語
▲表紙畫と裏繪……眞田久吉
▲同上木彫……川上邦世

東京市麻布區材木町六九舟木方
奇蹟發行所
電話番號芝二二五八

手販賣所 東京市京橋區尾張町二ノ二六 東海堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

定價一册 金廿五錢

峽灣

十月號

浴後の窓　秋田雨雀
綺語の墮落（オスカア ワイルド）　矢口達
秋の日の事實　山村暮鳥
斷想　林清智
巖端屋（脚本）　黑田玄一
天地開闢神話（ワインスタイン）　小川清彥
うらおもて　石井蔦二
別離　ゆめみるひこ
表紙及カット　山口八九子

發行所　東京牛込區下戸塚町十三　峽灣社
發賣所　東京神田區表神保町　東京堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

南方の花 創刊號

毎月一回一日發行
定價一部二十五錢

扉の中（戯曲）　國枝史郎
ヴイナスと痴人（ボードレエル）　相馬御風譯
神經質の夜（小説）　ヒヤシンス
燦けた鍵（散文詩）　三富朽葉
夜道（フランス物語）　齋藤與里
血のいろの花（訣）　寺井義
巴里から來た手紙（フランス物語）　津田青楓
初秋とわが心と（詩）　谷靜湖
春の夜（小説）　福永挽歌
幽かな黄昏（シャル、ゲラン）　川路柳虹譯
海の歌（對話）　ヒヤシンス

——私は私の好きな作家の作品を以て匂ひの高い雜誌を飾りたいと思ひます。（近藤元）

現今の歌壇に與ふる書　同人
歌數百首　同人
歌數百首　社友
前田夕暮論　同人

——私は私の好きな詩人の一團を以て南方の花社を組織したいと思ひます。（近藤元）

發行所
千葉縣安房郡岩井村高崎
南方の花社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番

東雲堂地方部

御取次に應ずべきは市内發行の圖書雜誌に限り候

■書籍は（原書醫書及現行教科書を除く）……一割引

■雜誌は（新聞を謝絶す）……御注文次第即時發送す

（注意）御注文の節は書名、定價、著者、郵税、發行所等（雜誌なれば何月より何月まで）明細に御認めの上割引價に郵送料必ず添附の上、振替貯金又は小爲替にて御注文下され度、切手代用は二割増と相定め候。

廣告

書籍雜誌取次販賣

■四十五年一月改正圖書目錄往復はがきにて御申越次第贈呈仕候。■

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂書店出版書

歌集	桐の花	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
歌集	水荘記	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢	送費金六錢
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	収穫	前田夕暮	定價金七十錢	送費金六錢
歌集	一握の砂	石川啄木	定價金六十錢	送費金六錢
歌集	悲しき玩具	石川啄木	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢	送費金六錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢	送費金六錢
詩集	霧	河井酔茗	定價金五十五錢	送費金六錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢	送費金六錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢	送費金六錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓	送費金八錢
戯曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓	送費金八錢
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢	送費金八錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢	送費金八錢

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地
電話京橋一六三九振替東京五六一四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美術
印刷

東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地

和洋式帳簿製造
活版石版印刷所

文祥堂印刷所

電話京橋一三六〇番
二五番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■畏くも宮内省御買上の光榮を蒙り天下無類！

内外各博覧會ニ於テ

名譽賞牌受領

みやけ油

登録商標

東京人形町通
木村三宅堂

すき油　びんつけ油

家庭重寶

粉末石鹼

（本誌愛讀者に限り一割引）

發賣元

東京市日本橋區人形町通り

三宅堂本舗

電話浪花六二〇・振替口座八七五一

■村井弦齋先生の賞賛の辭に曰く

日本一の純良髪油にして常にお用ゐになれば、第一髪のさきをからしません、まッ黒に光澤麗しく髪がしなやかになり、何時も洗髪のやうに、さらさらとして粘らず、殊に産後又は病後髪が拔ける場合等に用ゐて髪の發育を速かにしますから以前よりも長くふさふさとした洗い髪となります、又頭の病にかゝる事なく、のぼせをしづめ、ふけを取り老年になりても白髪になること遲し。

昭和44年 3月15日発行　　【第3回配本】

青　鞜　第 2 巻　（第2分冊）

編　著　者　平塚　らいてう
発　行　者　藤　原　正　人
発　行　所　（株）明治文献
印　　　刷　正　明　印　刷
製　　　本　（株）三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
G45
v.2
no.10

University of Colorado at [redacted]
[redacted]304 6746220

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER